
とある魔法少女と不幸な転校生

Hiro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔法少女と不幸な転校生

【Nコード】

N3166Y

【作者名】

H i r o

【あらすじ】

海鳴市にある私立聖祥大附属小学校に一人の転校生が現われた。少年の名前は上条麻と言った。少女達との出会いは少年に何をもたらすのか。三人の少女と一人の少年の物語が始まる。

プロローグ（前書き）

今回、子供の上条当麻となのは達のキャラクターをクロスオーバーさせて見たら、どのようになるのか興味を抱き、このような小説を書かせていただきました。

尚、この小説に出てくる上条はなのは達と同年ですので、原作の上条当麻とは少しばかり性格が異なるかもしれませんが、ご注意ください。

後、更新速度がゆっくりになるかも知れませんが、それでもよろしければお願いします。

プロローグ

少年はどこまでも『不幸』だった。

周囲の子供は彼の姿を見るなり石を投げ、周りの大人もその行為を止めようもしない。

疫病神と呼ばれ、蔑まれ続けた少年。

借金を抱えた男に追い回され包丁で刺されたこともあった。

マスコミに『化け物』扱いされ、カメラに写されたこともあった。

そして…少年は両親を事故で失った。

唯一の味方さえ失った少年は孤独だった。

そんなある日、彼は両親の知り合いと名乗る人物から海鳴市に行くように促される。

九歳の上条当麻は、海鳴市での新たな生活を始めるのだった。

第1話 担任は幼女！？（前書き）

相変わらず色々残念ですが、頑張っていきたいと考えておりますのでよろしく願います。

第1話 担任は幼女！？

電車に乗って海鳴市に向かう少年。

今まで住んでいた場所とは全く異なる土地で、新たな生活を始めることになる上条当麻。

しかし、少年は新生活に胸を躍らせたり、不安を抱いたりするといったことは一切無かった。

元々住んでいた場所では、陰湿ないじめを受け続けて、両親を事故で失い、少年は何もかも失った。

海鳴市で新たな生活を送ろうが、自分が疫病神であることに違いは無い。

九歳の子供とは思えない考えを抱きながら、少年は電車の中で深い眠りについた。

同時刻、二人の少女は海鳴市に到着していた。

「ここが海鳴市…」

「ああ…」

「ここにジュエルシードがあるんだね…」

「フェイト…あまり無茶しちゃだめだよ…」

「大丈夫…」

海鳴市に到着した上条当麻。

彼が両親の知り合いと名乗る人物から聞いた話によると、海鳴市の駅に転校先の小学校の担任が来ている筈なのだが、それらしき人物

は見当たらなかった。

当麻「これからどうしようかな……」

担任の教師が来ていないのに、自分だけが無闇やたらと動くわけにはいかなないと考えていた少年は呟く。

そんな少年に近づいてくる中学生くらいの少女が居た。

???「君…どうしたの？」

当麻「あなたは？」

真紀「私の名前は結標真紀よ」

当麻「上条当麻です」

真紀「何だが困っているみたいだったから…」

当麻「実は…」

事情を話した少年に少女は…

真紀「だったらお姉さんが一緒に探してあげるわ」

当麻「でも…迷惑を掛けますし…」

真紀「気にしない気にしない、単なるお節介だから」

半ば強引に協力を申し出る結標真紀に上条当麻は断りきれずに、申し出を受ける。

早速、担任の教師を探すために行動を開始する二人。

真紀「そう言えば、当麻君は何処の小学校に転校するのかしら？」

当麻「私立聖祥大附属小学校です」

真紀「私の母校じゃない!？」

当麻「そうですねですか？」

真紀「ええ。聞き忘れていたけど担任の先生の名前は？」

当麻「月詠子萌先生ですけど…」

真紀「子萌先生なの!?!? 確かに先生には見えないわよね…」

当麻「???」

真紀が言っていることが理解できずに、首を傾げる少年。

真紀「ちょっと待ってね」

携帯電話を取り出し、誰かに連絡する。

真紀「子萌先生に連絡したから、ちょっとそこの喫茶店で待ってましょ?」

当麻「はい」

『喫茶店』

真紀に促されるままに、喫茶店に入る当麻。

真紀「何か食べたいものあるかしら？」

当麻「いえ…」

真紀「子供が遠慮なんてしないの、すいませ〜ん。お子様ランチ一つとイチゴパフェ一つお願いしま〜す！」

少年の言葉を見殺して、メニューを頼む真紀。

メニューを待つ二人の下に、一人の少女が向かってくる。

???「う〜。警察の人に勘違いされちゃいましたよ…」

真紀「ようやく来たのね子萌。まあ…警察が勘違いするのもおかしくないけどね…」クス

子萌「酷いですよ〜結標ちゃん〜」

当麻「子萌？」

その名前に少年は聞き覚えがあった。担任の名前が確か月詠子萌だった。しかし、目の前の少女はどうみても大人に見えない。

子萌「貴方が上条当麻ちゃんですか？」

当麻「は…はい…」

子萌「月詠子萌です。先程は遅れてしまって申し訳ありませんでし

た」

そう言つて頭を下げる子萌。

しかし、少年は子萌の謝罪など全く頭に入つておらず…

当麻「先…生…？」

目の前の少女が自分の担任であることが信じられなかった。

真紀「まあ普通はそんな反応するわよね」

子萌「こらゝ！私はれっきとした大人なのですよゝ！」

頬を膨らませて怒る子萌の姿だが、全く迫力が無く、寧ろ愛くるしい印象を与える程である。

呆然としている少年だったが、子萌の一言で正気に戻る。

子萌「ともかく…ようこそ！海鳴へ！」

子萌に歓迎されて、どう反応すればよいのか分からずおろおろする少年。

そんな二人の様子を見ながら、微笑む真紀。

子萌が二人の下に現われてから、少しの時間が経ち、三人の前に料理が運ばれる。

お子様ランチを食べる少年とイチゴパフェを食べる少女。
食事が終了した三人は喫茶店を出る。

真紀「さて…私はそろそろ用事があるから此処でお別れだね」

子萌「結標ちゃん。ありがとうございました」

上条「ありがとう…ございました…」

真紀「そんじゃあまたね」

ヒラヒラと手を振りながら二人の前から立ち去る少女。

子萌「それでは行きましょうか？」

当麻「はい」

二人は私立聖祥大附属小学校に向かう。
時刻は昼前だった。

『私立聖祥大附属小学校』

お昼休みになり、高町なのはとアリサ・バニングス、月村すずかの
三人は今日転校してくる予定の転校生について話していた。

なのは「子萌先生が迎えに行ってたけど大丈夫かな…？」

アリサ「まあ子萌はあの見た目だから…」

すずか「トラブルに巻き込まれていないといいんだけど…」

三人は、子萌の見た目が原因で起きる問題を何度も目撃していたの
だ。

車を運転すれば未成年が運転していると誤解され、お酒やタバコを
買うときも警察に突き出されそうになった事もあるのだ。

転校生を迎えに行ったからといって、何事も無く帰ってくる可能性

は非常に低いのだ。

すずか「転校生って男子なのかな？それとも女子かな？」

アリサ「後少しで分かるんじゃない？」

なのは「友達になれるかな？」

すずか「きつとなれるよ」

アリサ「嫌な奴じゃないといいな…」

昼休憩が終了して、教室に戻ってくる子萌。

子萌「はいはい。皆さん静かにして下さいね」

子萌の言葉に反応して、席に戻る生徒達。

子萌「それでは転校生を紹介したいと思います！」

子萌の言葉にざわめく教室。

子萌「どうぞ」

彼女の言葉と同時に、教室に入ってくるツンツン頭の少年。

子萌「自己紹介をお願いします」

当麻「上条当麻です。よろしくお願いします」

なのは「（あれ？あの子？）」

なのは当麻の目に見覚えがあった。

アリサ「何か普通だね…」ボソッ

すずか「ア、アリサちゃん…」

当麻「(何だかこのクラス…女子の方が多い…?)」

少年はそんなことを考えながらも、淡々と自己紹介を済ませていった。

第1話 担任は幼女！？（後書き）

淡希「シヨタはどこ！？」

主「この時点でアンタはまだ子供だろ！？」

淡希「シヨタのためなら時間を越えるくらい余裕よ！！」

当麻「この人は？」

淡希「シヨタゲットオオオ！！」 シュン

当麻「え？」 シュン

主「…次回もよろしく…」

第2話 初めてのフラグ建築

『私立聖祥大附属小学校』

子萌「上条ちゃんの席は、高町ちゃんの隣ですよ」

子萌の言葉を聞いた少年だったが、肝心の高町という子が分からない。

そのことを知ったアリサは…

アリサ「此处だよ」

なのはの隣の席を指差す。

少年は少女が指差した席まで移動して、お礼を言った。

当麻「あ、ありがとう」

アリサ「どういたしまして」

少年はアリサにお礼を言った後に、席に着いた。

子萌「上条ちゃんへの質問はHRが終わってからにして下さいね」

子萌の忠告を生徒達は素直に聞いて、HRを済ませていく。

そして、HRが終わってクラスメートによる上条当麻への質問攻めが行われた。

「何処から来たの？」

「趣味は？」

「何処に住んでるの？」

クラスメートの質問攻めにおろおろする当麻。

アリサ「そんな一斉に質問しても答えられるわけ無いでしょ！」

当麻「君は？」

アリサ「アリサ・バニングスよ」

アリサの隣に居た二人の少女も自己紹介を行った。

すずか「月村すずかです」

なのは「高町なのはだよ」

三人の少女が続いてクラスメートも自己紹介を始める。

浜面「俺の名前は浜面仕上だ。よろしくな」

ボサボサ頭の少年が自己紹介を行う。

数少ない男子のクラスメートが増えたことで喜んでいるのだろう。

アリサ「早速だけど、色々質問してもいいかしら？」

当麻「うん」

アリサの質問に答える当麻。

クラスメートもそれで満足したのか、それぞれ席に戻る。

なのはは無意識に当麻を見つめていた。

少年の目に見覚えがあるのだが、それが何かは分からない。

アリサ「なのは？どうしたの？」

なのは「ううん。何でもないよ」

授業が終了して、今日から暮らすことになるマンションに向かう上条当麻。

自宅に向かって居た少年は、クラスメートの月村すずかに会おう。今にも泣き出しそうな表情をしている少女を、お人好しの少年が放っておける筈もなく…

当麻「どうしたの？」

すずか「上条君？」

すずかに事情を話すように求める少年。

他人から拒絶され続けた少年が自ら起こした行動。

少女が『不幸』に巻き込まれているのならば、自分がその『不幸』を背負えばいい。

そう考えた故の行動だった。

すずか「実は…」

自宅で飼っている猫が居なくなってしまったと話す月村すずか。

現在、家の人間に猫の搜索を手伝ってもらっているのだが未だに見つけられないということ。

少女からその話を聞いた少年の答えは決まっていた。

当麻「僕も手伝つよ」

すずか「え…でも…」

当麻「気にしないで」

猫の搜索を手伝うことを申し出る上条当麻。

あまり、他人に迷惑を掛けることが出来ないと考えていた少女だったが、少年の申し出を素直に受けることにした。

当麻「じゃあ僕はあっちを見てくるよ」

少女と別れ、猫を見つける為に動く少年。

猫を探し始めてから、数十分が過ぎる。

当麻「どこにいるんだろう…？」

周囲を見ながら歩く少年。

そこで彼は、道路にいる猫を見つける。

少女が猫の特徴に一致している事から、その猫が少女の飼い猫であることを推測する。

しかし、飼い猫にトラックが迫りつつあることを察知した少年は道路に飛び出す。

当麻「危ない！！」

しかし、少年が道路に飛び出したところで、状況が好転するわけではない。

少年は、猫だけは守ろうと強く抱きしめる。

トラックが少年を激突すると思われたが…

『Protection』

無機質な声が響き渡る。

少年に激突するはずのトラックは、何かに阻まれてその動きを止められていた。

何が起きたのか全く理解できない上条当麻は、自分の近くに金髪の少女を見かけた。

その少女はその場から、上条の姿を確認するとその場から立ち去って行った。

少年は少女にお礼を述べようとしたが、少女は既にその場におらず、一旦すずかに猫を見つけたという報告をするために、その場所を離れた。

猫を連れて少女に再び会った少年。

少女は目にうつすらと涙を浮かべながら、猫を抱きしめていた。

すずか「上条君…ありがとう…」

生まれて初めて他人から感謝の言葉を述べられて、動揺する上条。これが、少年が生まれて初めて他人にフラグを立てた決定的瞬間であることは誰も知らない。

感謝の言葉を述べる月村すずかと別れて、少年は気を取り直してマンションに向かう。

唯一の気掛かりと言えば、金髪の少女にお礼の言葉を述べられなかったことだが、今度会った際にお礼を言おうと決意する少年。

『マンション』

マンションに向けて歩き始めて数十分後、少年はマンションに到着

する。

海鳴市が一望できる様な大きさのマンションに、少年は溜息をつく。貧乏というわけではないが、いかにもな高級マンションに驚きを隠せない少年。

こんな所で、一人暮らしを始めるのだから、少々の不安を覚える。荷物は事前に、自室に運ばれているらしく少年は自身の部屋に向かう。

そこで、扉の前に着いた少年だったが、その隣の部屋の扉の前に一人の少女がいることに気付く。

その少女こそ、少年がお礼を延べようと思っていた人物だった。

????「あつ……」

当麻「君は……」

思い掛けない出会いに動きが止まる二人だったが、もう一人の少女がその場に乱入する。

????「どうしたんだいフェイト？誰だいアンタ？」

当麻「こ…こんにちは」

もう一人の少女に話しかけられて、挨拶をする上条。

フェイトと呼ばれた少女は、もう一人の少女に話しかける。

????「ふん。なるほどね」

フェイトの話を聞いて納得する少女。

少年は少女達が話している内容よりも、少女に犬耳がついていることに疑問を抱いていた。

フェイト「どうして君が此处に居るの？」

当麻「今日からこの部屋で暮らすことになったんだけど…」

「「え？」」

少年の言葉が予想外だったのか、動きの止まる二人。
少年に聞こえないような声量で、話した二人はそれぞれ自己紹介を行った。

フェイト「そうだったの…私はフェイト・テストロッサ」

アルフ「アルフだよ。よろしくな」

当麻「上条当麻です」

二人が自己紹介して、少年も自己紹介する。

当麻「あの時は助けてもらってありがとう」

フェイト「え…いいよ。気にしないで」

どうやら少女もお礼を言われることに慣れていないのか、少しばかり動揺していた。

当麻「あの…お礼がしたいんだけど…」

フェイト「お礼なんて…」

当麻「じゃあせめてこれだけでも…」

そう言つて少年は鞆からお菓子を取り出す。
海鳴市に着いた時に、購入したものだ。
少年はそれをフェイトとアルフに渡す。

フェイト「あ…ありがとうございます…」

アルフ「あたしも貰つていいのかい？」

当麻「はい」

照れているフェイトと喜んでいるアルフ。

そんな二人の姿を見て、少年は心が温かくなった。

海鳴市でも、元居た場所と同じように他人から傷付けられる事を覚悟していたが、海鳴市に来てまだ、一日も経っていないが、皆が非常に優しいということはよく分かった。

海鳴市は少年にとってあまりにも眩しく、そして心地良かった。

フェイト「海鳴市には初めて来たの？」

当麻「うん」

アルフ「親御さんはどうしたんだい？」

アルフの疑問は最もだった。

右も左も分らない状態で、少年を一人で今日から住む場所に向かわせるなど、普通の親ならそんなことをさせる筈はない。

アルフの疑問を聞いた上条当麻の表情は少しばかり暗くなった。

当麻「お父さんとお母さんは居ないんだ…」

アルフ「それはどういう…」

当麻「ちよつと前に事故でね…」

フェイト&アルフ「!?!」

予想外の言葉に、フェイトとアルフは驚愕する。

フェイト「ごめんね…」

アルフ「悪かったね…」

当麻「ううん…」

空気が重くなり全員が黙る。

そんな沈黙を破ったのは、アルフだった。

アルフ「ま、まあとにかくこれからはお隣さんってことでよろしく
!!」

アルフが無理やり明るく振舞い、フェイトと当麻の二人も明るく振舞う。

二人と別れて、自室に入った少年は鞆から写真を取り出す。
そこに写っていたのは、笑顔の両親と上条当麻だった。

フェイトとアルフの二人も自室に戻っていた。

アルフ「親がいない…か…」

フェイト「…」

アルフ「どんな気持ちなんだろうね…」

彼女達も、少年と同じく海鳴市に初めて訪れたのだが、少年とは異なり明確な目的がある。

本来なら少年の事など、気にしている余裕は無い。

しかし、少年が見せた寂しそうな顔が彼女達の脳裏に焼きつく。それぞれの思いを胸に抱き、少年達は明日を迎える。

第2話 初めてのフラゲ建築（後書き）

御坂「あいつが子供になっ たっ て!？」

主「そうだけど？」

御坂「あいつはどこなの!？」
「ビリビリ

主「ちょ…放電してるよ!？」

御坂「とつとと教えなさい!？」

主「結標さんが連れ去りました…」

御坂「何ですってええ!?!」
「ドオン

主「ぎゃあああ!?!」

第3話 暖かな食卓

翌日の放課後、月村すずかはアリサ・バニングスと高町なのはに昨日の出来事を話した。

少年の事を語るときの少女の頬が少しばかり赤かったことには、二人とも気付かなかった。

アリサ「意外と親切なのね」

すずか「うん」

なのは「そんなことがあったんだ」

アリサ「暗そうな雰囲気だったから薄情だと思ったけど、そうじゃなかったのね」

なのは「ア…アリサちゃん…」

少女達が上条当麻について話している頃、上条当麻は浜面仕上に小学校の屋上に呼び出されていた。

少年は暴力を奮われるのかと考えていたが、海鳴市に来る前の彼にとっては日常茶飯事だったので、特に気にするほどのことでもなかった。

屋上に到着した彼を待っていたのは、浜面仕上ただ一人だった。

仕上「来たか」

当麻「何の用？」

仕上「まあちよつとこつちに来いよ」

少年の言葉に従う当麻。

浜面に呼ばれた位置まで移動した彼が見たものは、海鳴が一望できるとても綺麗な景色だった。

当麻「これって…」

仕上「綺麗だろ？俺の秘密のスポットなんだよ」

当麻「どうして教えてくれたの？」

仕上「何かお前、元気が無いみたいだからさ。まあ、疲れたときはこの景色でも見て元気だせって」

当麻「あ…ありがとう浜面君…」

仕上「浜面でいって、俺も上条って呼ぶからさ」

当麻「う…うん」

転校してきたばかりの人間にお気に入り場所を教えるなど、浜面仕上もとても親切であると実感する上条当麻。

しばらくの間、少年達は屋上から海鳴の景色を眺めていた。

浜面と別れた少年は、晩御飯の材料を買う為に最寄のスーパーに寄った。

そこで、彼は先日お世話になった結標真紀に出会う。

真紀「あら、上条君じゃない」

当麻「昨日はありがとうございました」

真紀「どういたしまして」

どうやら彼女も買い物中だったらしく、買い物袋を持っていた。

彼女と一通り世間話をした後、少年は少女と別れた。

晩御飯の材料を買った少年は、マンションに向けて移動し始めた。

少年が自宅に向かっている頃、高町なのはは自宅にて上条当麻のことを両親に話していた。

なのは「…だっただよ」

桃子「随分親切な子ね」

土地勘の働かない場所で、猫を探すのは下手をすれば迷子になる危険性を含む。

少年が何も考えなかった可能性もあるのだが…

士郎「そうだ。なのは、今度彼を家に招待すればいいんじゃないか？」

なのは「え？」

士郎「始めて海鳴市に来るのなら、不安もあるだろうし、それにその子に会ってみたいからな」

桃子「彼の歓迎会をすればいいんじゃないかしら？」

なのは「でも、まだ知り合ったばかりだし…そこまで親しいってわけじゃないし…」

いくら高町家の人間がとても親切だと言っても、知り合ったばかりの人間の家にお邪魔することなど、少年が反対する可能性が高い。そんな少女の様子を見ていた士郎は…

士郎「それならクラスの歓迎会ということにすればいい。それなら、彼も参加しやすいだろうからね」

なのは「そうだね。じゃあ明日聞いてみる」

なのはが両親と話している頃、少年はマンションに到着していた。帰宅した少年は早速、晩御飯を作り始めた。料理を作っていた少年だったが、突如玄関の方向から音が聞こえた。

ぐっ！！

不審に思った少年が、玄関に向かい扉を開ける。

アルフ「う…腹減った…」

当麻「だ…大丈夫…？」

玄関を開けた少年が見たのは、涎を垂らしたアルフだった。アルフの態度から、お腹が減っていると判断した少年は…

当麻「もし良かったら、ご飯食べる？」

アルフ「え…いいのかい…？」

当麻「まだ作ってる途中だけど…」

アルフ「ありがとう!!」

目を輝かせてお礼を述べるアルフに若干顔が引き攣る当麻。
部屋にアルフを案内した当麻は、料理を再開する。

ちなみに、夕食のメニューは若鶏のから揚げ、味噌汁の二品だった。
両親が亡くなってから、一人で暮らしていた少年にとって料理は密かな趣味となっていた。

料理の匂いを嗅いだアルフのお腹の音は益々激しさを増していた。
そんなアルフの様子を見た当麻は、ある疑問がわいた。

当麻「いつもご飯はどうしてるの?」

アルフ「インスタントだけど?」

当麻「ご飯は作らないの?」

アルフ「あたしもフェイトも作れなくてね」

当麻「それって...『ピンポーン』...ん?」

インターホンが鳴って当麻は玄関に向かう。

玄関に居たのは、フェイト・テストロッサだった。

フェイト「あ...あの...アルフが来てないかな?」

当麻「来てるけど...」

アルフ「フェイト...おかえり...」

フェイトの言葉に手をヒラヒラ振りながら、

まるで、自分の部屋の様に振舞うアルフに溜息をつくフェイトと苦笑いをする当麻。

フェイト「何やってるの…?」

アルフ「トウマがご飯を作ってくれるって」

フェイト「え?」

当麻「君も食べる?」

フェイト「で…でも…迷惑じゃ『ぐ』…あ／／／」

当麻「ちょっと待っててね」

フェイト「…」コク

少年の言葉に若干赤くなりながら、無言で頷く少女。

アルフはそんなフェイトの様子を見ながら、笑っていた。

ようやく、料理が完成して料理をテーブルの上に並べる当麻。

フェイトとアルフも待っているだけではなく、皿を並べるのを手伝ったりした。

当麻「いただきます」

アルフ「いただきます」

フェイト「い…いただきます」

料理を食べ始める三人。

普段から、インスタント食品ばかり食べていた二人にとって、少年の料理はとても美味しかったらしく…

アルフ「美味い…美味いよ…!!」

フェイト「美味しい…」

凄まじい速度で箸を進める二人の様子を見ていた少年は、内心とても喜んでいた。

自分の料理を誰かに食べてもらう経験なんて、今までの人生で一度も無かったが、初めて他人に振舞った料理を絶賛されたのは、非常に嬉しかった。

その上、誰かと一緒に食事自体が久々で、食事もいつもより美味しく感じていた。

この瞬間、上条当麻は確かに『幸せ』だったのだ。

アルフ「ご馳走様!! あゝ美味かった…」

フェイト「ご馳走様。本当に美味しかった」

当麻「ご馳走様」

夕食を食べ終わった二人に、少年は一つの提案を行う。

当麻「あのさ…これからも二人の料理を作ってもいいかな？」

フェイト「でも流石に何度もご馳走になるのは…」

当麻「駄目かな？」

アルフ「ここはトウマのお世話になるうよフェイト」

フェイト「で…でも…」

当麻「僕が作りたいだけだから、フェイトは気にする必要なんてないよ」

フェイト「当麻…本当にいいの？」

当麻「うん」

アルフ「よっしゃ！これから毎日、美味しいご飯が食べられる！」

フェイト「あ…アルフ…」

当麻「あはは…」

第4話 孤独な少年と少女（前書き）

五和「上条さんが子供になったですって!!?」

神崎「上条当麻が子供に!?!」

御坂妹「あの人が…フフ…」

姫神「今の内に手懐けておけば…」

インデックス「ごはんはどうするの!?!」

レッサー「子供の内から調教しておけば、イギリスの引き込むことも容易かもしれません!?!」

主「上条当麻を巡る女性達の戦いが始まる。しかし、彼女達は知らない。彼女達自身が絶大な実力を持っているなど…」

上条「何ナレーションしてんだよ…」

主「ふざけすぎた…今回もよろしく願いします」

第4話 孤独な少年と少女

『マンション』

少年がフェイトとアルフの料理を担当することに決まってから一夜明けた。

早速、朝ごはんを作り始める上条当麻。

ピンポン！！

当麻「はい」

少年が玄関に向かい、扉を開けるとそこにはフェイトとアルフが居た。

アルフ「おはよう」

フェイト「おはよう」

当麻「おはよう」

二人をリビングに案内して、再び料理を作り始める少年。

そんな少年の様子を見ていたフェイトは、何か手伝えることはないかと尋ねたが、特に手伝ってもらったこともないので、少女の申し入りを断った。

それから、少し時間が経って料理が完成した。

アルフ「いったただきま〜す！！」

フェイト「いただきます」

当麻「いただきます」

朝食を食べ始める三人だったが、当麻がアルフにある質問をした。

当麻「ずっと気になってたけど、その耳は付けてるの？」

フェイト「そ…そうだよ…ねえアルフ…」

アルフ「いやこれは…」

フェイトの言葉を否定しようとするアルフだったが、フェイトの態度を汲み取ったのか少女に合わせた。

アルフ「そ…そうなんだよ！！中々似合うだろ！？」

当麻「う…うん…」

そんな二人の態度を見た少年は、未だに疑問を抱いたままだったが、とりあえずこの問題に対しては保留にしておくことにした。

当麻「ところで二人とも、学校はどこに言ってるの？」

フェイト&アルフ「それは…」

少年に自分達の事情を話すわけにはいけないと考えている二人は、その疑問に正直に答えるわけにはいかなかった。

フェイト「色々事情があつて…今は学校に行つてないんだ…」

アルフ「同じく…」

当麻「そうだったんだ…何だかごめんね…」

フェイト「気にする必要なんてないよ!」

アルフ「そ…そうだよ!」

慌てて取り繕う二人の様子を見て、少年は少し笑い…

当麻「それなら弁当を作ったほうが良さそうだね」

フェイト「流石にそこまでしてもらうわけには…」

当麻「前にも言ったけど、僕が勝手にやってることだから気にしないで」

当麻の態度を見たフェイトは、少年はこちらが断つても譲らないだろうと判断して、少年の申し出を受けることにした。

早速、二人分の弁当を作り始める少年。

そんな少年の後ろ姿を眺めていた二人は…

フェイト「どうしてここまでしてくれるんだろう…?」

アルフ「きっとトウマもフェイトと同じように優しいんだよ」

それから少年が弁当を作り終えて二人に渡して、少年も学校に向かった。

『私立聖祥大附属小学校』

昼休憩になり、給食を食べていた少年の下に高町なのはがやって来た。

当麻「高町さん？どうしたの？」

なのは「上条君。ちょっといいかな？」

彼女の隣にはアリサとすずかも居た。

当麻「う…うん」

なのは「あのね…」

少女はクラスで少年の歓迎会をしたいということを少年に伝える。

当麻「でも…皆に迷惑かけるし…」

なのは「そんなことないよ」

アリサ「そうよ」

すずか「駄目かな？」

当麻「ぼ…僕でよかったら…」

アリサ「よし！これで決まりね！」

少年の了承を経て歓迎会を行うことが決定する。

『公園』

上条当麻が昼休憩を迎えている頃、フェイトとアルフの二人は海鳴市の公園で弁当を食べていた。

アルフ「見つからないね。ジュエルシード」モグモグ

フェイト「うん…」モグモグ

アルフ「確かにこの世界で間違いないはずんだけど…」

フェイト「こればかりは地道に探すしかないよ」

アルフ「それもそっかぁ」

フェイト「（もし、この世界に無かったら、当麻とお別れすることになる…）」

二人の少女がこの世界で出会った一人の少年。

たった二日程度しか経っていないが、彼女達は少年とともに仲良くなっていた。

自分で料理が作れない彼女達にとって、少年が作る料理は新鮮だったし、一緒に食事をしている間は、確かに楽しいと感じていた。

海鳴市にずっと留まる訳にはいかない少女達にとって、少年という時間は大切にしかつたのだ。

『図書館』

小学校の授業が終了して、少年は真っ先にマンションに帰ろうとは

せず、図書館に向かった。

海鳴市に来る以前も、図書館にいたことが多かった少年。

他人から傷つけられるばかりの少年にとって、図書館は唯一静かに過ごせる場所だったのだ。

海鳴市の図書館に入って、何か適当な本はないかと探していた当麻だったが、そこで彼は一人の少女を見かける。

???「やっぱり取れんな〜どうしよう…」

何やら車椅子の少女が本を取ろうとしているのだが、少女が取ろうとしている本の位置が、高いところにあり、彼女は困り果てているようだった。

そんな少女の下に、少年は近寄ると…

当麻「あの…手伝おうか？」

???「え？」

突然の申し出に動揺する少女だったが、少し時間を置いた後…

???「頼んでもええの？」

当麻「うん」

???「あの本なんやけど…」

当麻「分かった」

少女が指差した場所にある本は、少年の背が届かない場所にあったらしく、少年は脚立を使用して本を取ったのだが…

ガシャーン！！

脚立から盛大に落ちた少年は、勢い良く地面に激突する。

「???」だ、大丈夫か!？」

当麻「いたた…大丈夫だよ…慣れてるから…」

幼い頃から生傷の絶えなかった少年にとって、この程度のことは大して気にするほどのことでもなかった。

「???」慣れてるって…」

当麻「それより…はい…」

そう言って少年は少女に本を渡す。

「???」おおきに」

当麻「どういたしまして」

「???」初めて見る顔やけど、図書館に来るのは初めてなん?」

当麻「少し前にこの町に引っ越してきたんだ」

「???」そうだったんか。そういやまだ自己紹介しとらんかったね。八神はやてや」

当麻「上条当麻だよ。八神さんは良く図書館にいるの?」

はやて「せやな。普段から図書館におるで」

当麻「学校はどうしたの？」

はやて「事情があつて行けないんや…」

当麻「ごめんね…」

はやて「ええて。上条君が気にすることやあらへん」

沈む少年を元気付ける少女。

はやて「そう言えば、上条君は始めてこの図書館に来たって言つたけど、案内してあげようか？」

当麻「いいの？」

はやて「困ったときはお互い様や」

当麻「ありがとう」

少女に図書館を案内してもらう少年。

二人は話しながら、ある共通点があることが発覚する。

上条当麻と八神はやては事故で両親を亡くしており、ずっと一人暮らしだったということ。

同じような境遇の人間に出会つていなかった二人は、非常に驚いていたが、再び話し始めていた。

はやて「上条君の趣味は料理なんやな」

当麻「八神さんも料理が趣味なんだね」

はやて「今度、家の料理を食べてみるか？」

当麻「こっちも何か作ってこようか？」

はやて「せやね」

当麻「そろそろ帰らなきゃ…」

はやて「そっか…」

当麻「じゃあ八神さん。また明日」

はやて「…上条君。また明日な」ニコ

上条当麻は八神はやてと分かれて帰路に着く。
その頃、海鳴市に一人に男が訪れていた。

「???」ここが海鳴か…この霊装の威力を試すのに最適な場所だな
…」

男は引き裂いた様な笑みを浮かべて歩を進めていた。
平和な町に迫り来る危機に気付く者は誰もいない。

第5話 謎の『右手』

数日後、上条当麻は浜面仕上とアリサ・バニングス、月村すずかと高町なのはの五人で昼休憩を過ごしていた。

最初は、緊張していた少年も浜面やなのは達の協力もあり、徐々にクラスに打ち解けてきた。

仕上「学園都市に行ってみて〜な〜」

アリサ「どうしたのよ浜面？」

仕上「だって科学技術が物凄く発達してんだぜ？何か夢があるじゃん」

なのは「そういうもののなの？」

当麻「分からないけど…」

すずか「子萌先生も学園都市から来ているのよね？」

なのは「うん」

当麻「どうして子萌先生は海鳴に来たんだろう？」

仕上「それは本人に聞いてみねーと分かんねーだろ」

アリサ「でも浜面。学園都市って旅行で行ける様な場所じゃないのよ？」

仕上「マジで？」

すずか「年に一度、大覇星祭っていう行事で外部の人に一般開放されるらしいけど…」

なのは「基本的に、学園都市に学生として入学したら、学園都市の外に行くだけでも大変な手続きが必要になるんだって」

仕上「うへえ… あんまいもんじゃねえな…」

当麻「浜面は学園都市に行きたかったの？」

仕上「だってロボットがいるんだぜ！？男のロマンだろ！？」

なのは「そうなの？」

当麻「僕にはよく分かんないけど…」

仕上「分かってねえな上条。それに超能力なんて物もあるんだぜ？」

なのは「脳を開発して超常現象を引き起こす力だっけ？」

すずか「でも、脳を開発するなんてちょっと怖い」

アリサ「大体、超能力なんて何に使うのよ？」

仕上「う…それは…」

アリサ「全く…浜面は浜面なんだから」

他愛ない話をする少年少女達。

そこで、浜面が何かを思い出したように語る。

仕上「そついや、ここ最近海鳴で何か事件が起きてるらしいけど、あれは化け物の仕業っていう噂があるらしいぜ」

当麻「化け物の仕業？」

なのは「そんなのがいるの？」

アリサ「いるわけないでしょ……」

すずか「ア…アリサちゃん……」

仕上「何でも石の巨人みたいなのが、暴れまわってるらしいんだ」

アリサ「石の巨人ねえ……」

当麻「どれくらい大きいの？」

仕上「そこまでは分からないけど、多分巨人っていうくらいだから、相当でかいんだろうぜ」

雑談している少年少女達だったが、そこで思わぬ横槍が入る。

子萌「みなさん。本日の授業はこれで終わりにしました」

予想だになかった月詠子萌の言葉に動揺する一同だったが、

仕上「せんせゝそれって、海鳴の事件が原因ですか？」

子萌「秘密です。皆さんは寄り道せずに帰ってくださいね」

そう言つて教室から出て行く子萌。

その後ろ姿を見ていた少年少女達は…

「……怪しい……」

全員、子萌の態度を不審に感じていた。

しかし、子萌の言葉を素直に聞いていた一同はそれぞれ帰宅することに決めた。

上条当麻が小学校から出た頃、フェイト・テストロッサとアルフは海鳴市のスーパーを訪れていた。

何故彼女達がスーパーに来ているのかというと、フェイトが上条に料理を作らせつつ放しでは忍びないので、買い物だけでも任せて欲しいと言つたからである。

フェイト「えつと…この商品は…」

アルフ「フェイト、これ買つてもいい？」

フェイト「いいよ。それで…これは…何処にあるの？」

順調に買い物を済ませていくフェイトだったが、少年に頼まれた商品が見つけれなかった。

途方に暮れている少女達に近づく一人の女子中学生が居た。

真紀「どうしたの？」

フェイト「あ…えっと…商品を探しているんですけど…見当たらないくて…」

真紀「もし良かったら手伝いましょうか？」

アルフ「いいのかい？」

真紀「困ったときはお互い様だからね」

フェイト「あ…ありがとうございます」

真紀「それじゃちゃっちゃと見つけちゃいましょうか」

結標真紀に協力してもらい、再び商品を探し始めるフェイトとアルフ。

探していた商品が見つかり安堵する二人。

アルフ「ありがとね」

フェイト「ありがとうございました」

真紀「どういたしまして。それじゃ〜ね〜」

手をヒラヒラ振りながら二人の前から去っていく少女。

フェイト「親切な人だったねアルフ」

アルフ「そうだね」

買い物を終えた少女達は、マンションに向けて移動を開始した。
その頃、上条ははやてに出会っていた。

どうやら彼女は今日も図書館に出かけていたのだが、図書館がいつもより早く閉じてしまい、困っているところだったらしい。

はやて「それにしても、物騒な世の中やな」

当麻「そうだね。早く事件が解決するといいんだけど…」

はやて「せやな…って何やあの人…けつたいな格好しおってからに…」

当麻「ちょ…八神さん…失礼だよ…」

二人は一人の男を見かける。

その男は黒い服装をしているのだが、明らかに過剰にアクセサリのような物を身に纏っていた。

海鳴では決して見る事の無い姿の人間に、若干警戒心を抱きながら男の前を通り過ぎようとする二人だったが…

???「この力…素晴らしい…」

男はそう呟くと、懷からチョークのような物を取り出して、地面に何かを描き始めた。

ズゴォ!!

瞬間、地面が隆起して巨大な石の巨人が二人の前に現われた。

ゴーレム「グオオオオオオ!!」

当麻「な…あれって…」

はやて「な…なんなん…あれ…」

浜面仕上から聞いた単なる噂だった筈の存在が、上条当麻と八神はやての前に居た。

???「殺せ」

男の言葉を聞いた瞬間、少年は少女の車椅子の取っ手を掴みその場から全力で逃げ出していた。

未だに目の前の現実を受け入れる事が出来ない二人だったが、あのゴーレムが危険ということは本気で理解したのだろう。

必死で怪物から逃げる二人だったが、焦りながらも会話を交わす。

はやて「上条君！なんなんあれ!？」

当麻「分かんないけど、とにかく逃げなきゃ!!」

全力で逃げる二人を追いかけるゴーレムだったが、二人が子供ということもあり、姿を見失ってしまう。

???「ちっ…」

男は二人を逃がしてしまったことに苛立つが、例え警察を呼んだところで何かが出来るわけでもない。

ゴーレムを撒いた二人は…

当麻「何とか逃げ切れたのかな…?」

はやて「上条君…私…怖い…」

無理もないだろう。

ゲームやアニメの様な非現実な出来事が目の前で起きたのだから…

当麻「一旦僕の家になんかしよう！」

はやて「え？」

少年は少女をマンションに連れて行くことを決意する。

動揺するはやてだったが、少年もそこまで気が回っておらず、少女の言葉を見殺ししてマンションに辿り着く。

そこで彼はフェイトとアルフに遭遇する。

フェイト「当麻？どうしたの？」

冷や汗の出ている少年を不審に思ったフェイトは当麻に問いかける。

アルフ「そっちの子は？」

当麻「悪いけどこの子をお願い！！」

アルフの質問を見殺しして、少年は再びゴーレムの所に向かおうとする。

はやて「駄目や上条君！！危険すぎる！！！」

当麻「大丈夫だよ」

一言呟き、少年は先程ゴーレムと遭遇した場所まで走って行った。

はやて「上条君…どうして…」

フェイト「一体何があったの？」

二人に何があったのか尋ねるフェイト。

はやては先程の出来事をフェイトに語る。

少女の言葉を聞き終えたフェイトは…

フェイト「アルフ！！この子をお願い！！」

アルフ「分かった！！」

はやて「危険や！！」

フェイト「大丈夫…当麻は任せて！！」

フェイトも上条が向かって行った方向へ駆け出す。

はやてはそんな少女を呆然と眺めていることしか出来なかった。

先程、ゴーレムと遭遇した場所まで戻ってきた少年。

辺りを見回す少年だったが、謎の男もゴーレムも見当たらない。

何処か別の場所に行ったのかと考える少年だったが…

きやああああ！！

悲鳴が聞こえて、その場所に向かって全力で駆け出す。

少年が悲鳴がした場所に辿り着くと、黒髪のショートの少女がゴーレムに襲われていた。

すかさず少年は少女とゴーレムの間に割り込む。

当麻「大丈夫？」

????「う…うん…」

当麻「良かった…君は早く逃げるんだ！」

????「で…でも…」

当麻「僕なら大丈夫…だから早く！」

少年の言葉を聞いた少女は、無言で頷きその場から逃げ切る。

少年は男とゴーレムを睨みつける。

男は少年の姿を見て鼻で笑い、ゴーレムに少年を殺すように命令する。

その拳は、人間の原型を留めることが不可能と言ってもおかしくないほどの威力を持っている。

少年は、目の前の存在が恐ろしくて震えが止まらない。

今すぐにでも逃げ出したい衝動に駆られる。

しかし、少年は逃げない。

今、ここで自分が逃げたら目の前の化け物は他の人間を襲うことを知っているから。

ゴーレムの拳が少年に迫る。

少年は両手を交差していた。

フェイト・テストアロッサは上条当麻を追っていたが、途中で見失ってしまう。

遅くなればなるほど、少年は危険に晒される可能性が高いと知っている少女は焦っていたが、突如そこまで遠くない場所から少女の悲鳴が聞こえる。

少女は悲鳴が聞こえた方向に走り、その現場に辿り着くが、少年が今まさにゴーレムの一撃を受けようとしているところだった。少年を追っている為に「していない少女だったが、今から「したところで少年を助けられるわけではない。」

フェイト「当麻ああー！」

少女の叫びも虚しく、ゴーレムの拳は上条当麻に直撃した。しかし、少年が死んでしまうという少女の幻想は殺された。

バキン！！

ゴーレムの拳が、上条当麻の『右手』に触れた瞬間、世界が割れる様な音が周囲に響き渡った。

ゴーレムの動きが停止することに驚愕する男とフェイトと当麻だったが、更に驚くべき出来事が発生した。

ボゴオオ！！

突如、少年に触れたゴーレムの身体が崩れ始めたのだ。

???「なっ…！？」

フェイト「何が…！？」

当麻「え…？」

あまりにも異常な事態に思考が停止する三人だったが、ゴーレムの身体が再び信じられない速度で再生する。

ゴーレムの胸元には小さな宝石の様な物が光を放っていた。

フェイト・テストロッサはその宝石に見覚えがあった。

フェイト「あれって…ジュエルシード!？」

???「くくく…とんだイレギュラーがあつたが、俺にがあの宝石がある」

男は実力のある「」ではなかったが、ジュエルシードを使用することにより、あれほどのゴーレムを作り出せる程の力を得たのだ。男は引き裂いた様な笑みを浮かべて、ゴーレムに再び少年を攻撃するように命令した。

しかし、この場にいるイレギュラーは上条当麻だけではなかった。

フェイト「バルディッシュ!！」

『Photon Lancer』

突如、金色の魔力弾がゴーレムに直撃する。

何が起きているのか理解できていなかった男と少年は、攻撃が放たれた場所を見る。

そこには、フェイト・テストロッサが居た。

しかし、普段の彼女とは全く異なる服装をしており、何に似ているかと表現するならば、魔法少女という言葉が最適だった。

呆然とする二人だったが、少女は続けて手に持っている鎌の様な物をゴーレムに向けて…

『Sealing mode・Setup』

フェイトの鎌から光の様な物がゴーレムに直撃する。

そして、ゴーレムの身体が徐々に崩壊する。

そして…

フェイト「ジュエルシールド、封印!!」

『Sealing』

ゴーレムの身体が完全に崩壊して、その身体から小さな宝石が出現して、その宝石はフェイトの持つ鎌の様な物に吸収されていた。もとの姿に戻ったフェイトを呆然とした表情で見ている上条当麻。

フェイト「当麻…今まで隠しててごめんね…」

悲しそうな表情で呟くフェイト・テストアロツサ。

一方その頃、ゴーレムを倒された男は逃走していた。そんな彼の前に、中学生くらいの少女が現われる。

男は少女を無視してその場を通り過ぎようとしていたが…

ヒュン!!

ドス!!

???「うつ…」

少女の一撃を受けた男はその場に倒れる。

真紀「全く…傍迷惑な『魔術師』ねえ」

結標真紀は一人で呟く。

真紀「それにしても…あの子が『魔導師』ね…まあ悪い子じゃなさ

そうだから、別に放っておいてもいいかな」

少女は倒れた男を放置してその場から悠々と立ち去って行った。

第6話 フェイトの決意と当麻の歓迎会（前書き）

滝壺「はまづらが子供になった？」

絹旗「私がお姉ちゃんに超なるわけですね!？」

麦野「今なら簡単に殺せるか…」

主「麦野さんだけ物騒すぎますよ!」

麦野「あ!？」

主「ナンデモアリマセン」

フレメア「今の私ならはまづらと幼馴染にゃあ」

第6話 フェイトの決意と当麻の歓迎会

ゴーレムを倒した二人は八神はやたとアルフに合流して、はやてを自宅に送った後、上条当麻とフェイト・テストアロッサとアルフの三人は少年の自室に集合していた。

当麻「…」

フェイト「…」

アルフ「…」

先程から一言も話さない一同。

沈黙がその場を支配する。

しかし、そのままでは埒が明かないのでアルフが口を開く。

アルフ「当麻には知られなくなかったんだけどね…」

当麻「二人は…一体…」

フェイト「私達はね…別の世界から来たんだよ」

当麻「別の…世界…？」

少年は少女が何を言っているのか全く分からなかった。
別の世界なんて存在するか定かでもない世界から来たというのだから。

それから、少女達は自らの正体を語り始めた。
フェイトが昼間見せた姿は、デバイスと呼ばれる道具を用いて変身

した姿であるということ。

その姿になると魔法と呼ばれる力を行使できるということ。

ゴーレムの身体に埋め込まれていた宝石は、ジュエルシードと呼ばれるもので莫大な力を秘めているということ。

少女達がこの世界に来たのは、ジュエルシードと呼ばれる宝石を手に入れるためであること。

アルフは人間ではなく、フェイトが魔力で作り出した使い魔という存在であること。

唯一の一般人である少年にとって信じられないような話のオンパレードだったが、目の前で魔法を使った場面を見たことから少年は少女の言葉を疑う余地は無かった。

フェイト「ごめんなさい…私のせいで当麻を巻き込んだじゃって…」

突然、少年に謝罪の言葉を述べる少女に少年は困惑する。

少女が謝る必要など全く無いのだが、一人で全てを背負い込みがちな少女は少年に謝らずにはいられなかった。

当麻「フェイトは何も悪くなんてないよ。それにフェイトが助けてくれたおかげで僕はここにいられるんだから」

フェイト「…」

当麻「それより…どうしてフェイトはジュエルシードを集めているの？」

少年は少女が世界を超えてまで、ジュエルシードを集めることがどうしても理解できなかった。

お使い感覚で世界を超えられるようなことなんてあるはずもない。だからこそ、少年は少女がそこまでする理由が知りたかったのだ。

フェイト「それは…」

アルフ「フェイト…」

当麻「どうしても知りたいんだ…駄目かな？」

フェイト「私は…お母さんの為に…」

当麻「お母さんの？」

アルフ「フェイトの母親がジュエルシードを必要としていてさ…フェイトはその為にジュエルシードを集めているんだよ」

当麻「そうだったんだ…」

まだ幼い子供で世界を渡らせてまでジュエルシードを集めさせるなんて普通はありえない。

心なしかフェイトの母親のことを語るときのアルフの表情が少しばかり暗かった。

当麻「フェイトはこれからジュエルシードを探し続けるの？」

フェイト「うん」

強い決意を秘めた目で少年の言葉に答える少女。
しかし、どこかその瞳は哀しげだった。

上条当麻という少年はそんな少女の話を聞いて一つの決意をする。

当麻「僕にもジュエルシードの搜索を手伝わせてくれないかな？」

フェイト&アルフ「え？」

予期しない少年の言葉に少女達は動揺する。

家事や宿題を手伝うといった生易しい問題ではないのだ。

先程のゴーレムの戦闘を体験している少年が、ジュエルシードを集めることの危険性を理解していないわけではないのだ。

それなのに、目の前の少年は二人を手伝うと申し出てきたのだ。

フェイト「だ…駄目だよ！当麻は魔法を使えない一般人なんだよ！？」

アルフ「そ…そうだよ！」

二人は少年の申し出を断るが…

当麻「お願い」

頭を下げて二人に頼み込む上条当麻。

短い間ながらフェイトとアルフは、この少年は一度決めたことを絶対に曲げないほど頑固であることを熟知していた。

フェイト「分かった…でも絶対に無茶しちゃ駄目だよ？」

当麻「うん！」

嬉しそうに喜ぶ少年の姿を見て、苦笑いするフェイトとアルフ。

正直言つて、ただの一般人である少年にジュエルシードを見つけれれるとは思わなかった。

しかし、危険を承知で自分に味方してくれる少年の気持ち無下にす

ることなど少女達に出来なかった。

一方その頃、自宅で図書館から借りた本を読んでいた八神はやては…

はやて「あの時の上条君かつこよかったな…」

思い出すのは昼の出来事。

初めて会った時はどこか頼りない印象を抱いていたが、ゴーレムと対峙した際に見せた強い決意を秘めた表情。

身を挺してまで自分を守ってくれた少年の事を思い出すたびに、少女は顔が赤くなるのを感じていた。

翌日、上条当麻は浜面仕上と共に翠屋の前に居た。

本日は、上条当麻の歓迎会が行われる日だったのである。

当麻「ここでいいのかな？」

仕上「とつとと入ろうぜ！」

カラン！

勢い良く扉を開ける浜面仕上。

店内は少年のクラスメート達で埋め尽くされていた。

呆然としている当麻だったが、少年の下に一人の女性が近づいてきた。

桃子「あなたが上条君ね？」

当麻「は…はい…上条当麻です…」

桃子「そんなに緊張しなくてもいいのよ？私は高町桃子。なのはの母です」

当麻「高町さんの…」

仕上「とつとと座ろうぜ上条」

いつの間にか席についていた浜面仕上が上条に手を振る。
桃子に促されて席に着く少年。

そんな少年の下にケーキを持ったなのはが近づいて来た。

なのは「上条君。いらっしやい」

なのはにケーキを渡される当麻。

当麻「あ、ありがとう高町さん」

なのは「どういたしまして」

ケーキを渡されてなのはにお礼の言葉を述べる。
そして本日の進行役であるアリサが…

アリサ「全員に行き渡ったわね？それじゃあ上条の歓迎会を今から
行っわよー！」

アリサの言葉に同意するクラスメート達。
そして、一斉にケーキを食べ始める一同。

仕上「やっぱりここのケーキは超うめえー!!」

ケーキにがつく浜面を見たアリサは…

アリサ「あんた…もうちょっと丁寧に食べなさいよ…」

すずか「あはは…」

呆れるアリサと苦笑いするすずか。

ケーキを食べている最中の当麻に一人の男性が近寄ってくる。

士郎「うちのケーキは美味しいかな？」

当麻「とても美味しいです」

士郎「喜んでくれているようで何よりだよ。私は高町士郎。なのはの父親だよ」

当麻「今日は本当にありがとうございます」

士郎「かしこまらなくていいんだよ。そう言えば君はどのあたりに引越したんだい？」

上条当麻が海鳴市の何処に住んでいるのか聞いていなかったクラスメートは、その話に耳を傾ける。

当麻「僕は…」

海鳴市のとあるマンションに住んでいると告げる上条。

士郎「なるほど。そう言えば君のご両親も海鳴に來たばかりだろう？ご両親のケーキも用意しようか？」

当麻「両親は…」

少しばかり暗い表情になった少年は両親がいないことを淡々と語り始める。

少年の話を聞いた一同は驚愕していた。

クラスメートも上条の両親が居ないことは知らなかったらしく、呆然としていた。

高町士郎と高町桃子も沈痛な表情をして…

士郎「すまなかったね…辛かったろう…？」

当麻「いえ…それに…」

桃子「それに？」

当麻「皆のおかげでそれほど辛くないんですよ」

海鳴市に訪れるまでは少年の味方は両親だけで、常に周囲の人間の悪意に晒されてきたのである。

しかし、海鳴市では少年を傷つけるような人間はおらず、むしろ心優しい人ばかりで少年は確かな『幸せ』を感じていたのだ。

士郎「そうか…」

静まりかえった店内だったが、突如浜面が…

仕上「おい上条！早くケーキ食わないと俺が食っちまうぞ！」

当麻「は、浜面！？ちょっと待って!？」

浜面の突然の行動に焦る上条。

周囲の人間はそんな彼等のやりとりを聞いて、笑い出した。
再び明るい雰囲気を取り戻す店内。

ケーキを食べ終えた上条は…

当麻「あの…このケーキを三つ頂いてもいいですか？」

桃子「ええ…どうぞ」

当麻「ありがとうございます」

上条当麻の歓迎会が無事終了して、クラスメートはそれぞれ解散した。

後片付けを手伝う高町なのは、初めて少年に出会ったときの違和感の正体を理解した。

少年が時折見せた寂しそうな表情。

それはかつて、高町なのはが一人だったときと酷似していたのだ。
しかし、少女は少年の様に大切な人を失ったわけではない。

少年と少女には決定的な違いがあった。

当麻は自宅に向かう前に八神はやての自宅に向かった。

ピンポン！

はやて「はい」

扉を開くはやては当麻の姿を確認する。

はやて「上条君？どないしたの？」

当麻「ケーキ貰ったんだけど、良かったらどうかな？」

はやて「ええの？」

当麻「うん」

はやて「おおきに！」

喜ぶはやてを見て微笑む少年。

当麻「それじゃあ僕はこれで」

はやて「ありがとな…あ！」

当麻「どうしたの？」

はやて「上条君。明日図書館に来れるか？」

当麻「行けるけど…」

はやて「弁当作ってもええか？」

当麻「いいの？」

はやて「ケーキをくれたお礼や」

当麻「ありがとう」

約束をして自宅に向けて移動する少年。

帰宅した少年は、フェイトとアルフを誘って本日翠屋で貰ったケー

キを食べた。

アルフ「滅茶苦茶美味いよこれ!!」

フェイト「うん」

ケーキを頬張る二人を見て、少年はこの幸せがいつまでも続けばいいと願っていた。

第7話 始まりの物語

翌日、はやてから弁当を渡された上条はマンションにて、フェイトとアルフと一緒に渡された弁当を食べていた。

どうやら彼女の弁当の味は少年よりも上だったらしく、二人は絶賛していた。

フェイトとアルフは弁当を作ってくれた八神はやてに、近いうちにお礼をすることに決めた。

弁当を食べ終えた三人は、ジュエルシードの搜索を始めた。

当麻は初めてのジュエルシードの搜索ということもあり若干緊張していた。

フェイト「そんなに緊張する必要はないよ」

アルフ「そ〜だよ。別に当麻が戦う必要なんてないんだし〜」

当麻「う…うん」

ジュエルシードを探しながら少年は、フェイトからジュエルシードの特徴について教えられていた。

ジュエルシードは全部で21個存在しており、それぞれが強大な魔力を秘めており、周囲の生物が抱いた願望を叶える力を持っているらしい。

フェイトの母親が何故そのような物を探させているのか全く検討のつかない少年だったが、今はその問題については後回しにしておこうと考えた上条当麻だった。

結局、本日はジュエルシードを発見することが出来なかった一同。マンションに帰った三人は早速夕食の準備に取り掛かる。

夕食を食べ終わった三人はそれぞれの部屋に戻って行った。

ベッドに入った少年は、ジュエルシードの事について考えていた。周囲の人々の被害を未然に防ぐためにも、一刻も早くジュエルシードを回収しなければいけないことは分かっている。

しかし、ジュエルシードを回収し終えたらフェイトとアルフは海鳴市を去ってしまう。

自分の考えが我侭である事を承知しながらも、少年は二人に去って欲しくなかったのだ。

こうして夜が更けていき、海鳴市に来てから初めての休日は終わりを告げた。

授業が終わって下校中の一同。

アリサ「魔法少女？」

仕上「そうなんだよ。何でも謎の化け物もそいつが倒したらしいぜ」

すずか「流石に魔法少女なんていないんじゃないかな？」

なのは「私もそう思うけど…」

当麻「ま…魔法少女もゴーレムも噂なんじゃないかな…？」

フェイトとゴーレムの戦いの様子を誰かに見られていたのだろうか。噂の中心部に居た少年としては、非常に気まずかった。

仕上「確かにそうだけだよ。でも本当だったら何か面白そうじゃない」

アリサ「謎の化け物とはかく、魔法少女は夢があるかもね」

すずか「確かにそうだね」

なのは「にやはは……」

再び歩き始める一同だったが…

???「（聞こえますか！？僕の声が聞こえますか！？）」

なのは「！？」

当麻「高町さん？どうしたの？」

なのは「聞こえないの？」

アリサ「何が？」

どうやら今の『声』はなのは以外には聞こえていないようだった。

少女は『声』がした方向へ駆け出していた。

他のメンバーは何が起きているのか全く分からなかったが、とりあえずなのはを追いかけることに決めた。

そして、なのはを追った少年少女達が見つけたのは、傷だらけになつて倒れているフェレットだった。

なのは「大丈夫！？」

アリサ「ど、どういうこと！？」

すずか「早く手当てをしてあげなくちゃ…！」

当麻「この近くに動物病院は…」

仕上「俺は知ってる！早く連れて行くぞ！」

なのは「う、うん！」

なのはがフェレットを抱きかかえて、一同は最寄の動物病院まで向かった。

フェレットを医師に預けた後、少年少女達はフェレットを誰が預かるかについて話していた。

仕上「俺んちは多分無理だ」

アリサ「私も親が…」

すずか「…」

なのは「私がお父さんに聞いてみようか？」

当麻「僕が飼うよ。一人暮らしだから何の問題もないから」

なのは「分かったよ。それにしても…」

アリサ「何であのフェレットは傷だらけだったんだろ…？」

すずか「もしかして…誰かに虐待されたのかな…？」

仕上「もしそうなら…俺がそいつをボコボコにしてやる…」

当麻「落ち着いて浜面…」

明らかな怒りを見せる浜面だったが、当麻が落ち着かせる。
とにかく、一旦帰ることを決めた少年少女達。

上条はフェイトとアルフの二人に合流して、本日のジュエルシードの搜索を始めた。

いつもより暗い雰囲気醸し出している少年を、不審に思ったフェイトとアルフは少年に何があったのかを聞いていた。

フェイト「そんなことが…」

アルフ「…」

当麻「うん…」

フェイト「当麻はその子を飼う事にしたんだよね？」

当麻「うん」

フェイト「じゃあ今度ペットフードとか皆で買いに行こうか？」

当麻「…そうだね」

ジュエルシードの搜索を再開する三人。

それから数時間が経って、本日も見つからないのかと考えていた三人。

そろそろ帰宅する時間に近づいてきたが、そこで少年が一つの提案をする。

当麻「ちよつとあつちを見てくるよ」

フェイト「分かった」

アルフ「早く戻ってきなよ」

フェイトとアルフも別の方向へ移動する。

二人と別れた少年はジュエルシードを探し続けていたが、そこで彼は思わぬ人物を見つける。

当麻「高町さん？」

なのは「か…上条君!？」

当麻「どうしたのこんな時間に？」

なのは「ちょ…ちょっとね…」

何が起きているのか理解できない少年だったが、少女の焦った表情を見た上条当麻は…

当麻「なんだか分からないけど、僕もついて行くよ」

なのは「え…でも…」

当麻「それに、もうこんな時間だし一人じゃ危ないよ」

なのは「…ごめんね…」

当麻「気にしないで」

そして少年は少女にどこに向かうつもりなのかと質問する。

少女は動物病院に向かうつもりだったらしく、移動中に少年と遭遇

したということらしい。

少年は何故動物病院に向かうのかその理由が分からなかったが、少女にその理由について聞くようなことはしなかった。

動物病院に到着する高町なのはと上条当麻。

当麻「やっぱり誰もいないのかな？」

なのは「…」

何かを探すような動作をするなのはに疑問を覚える当麻だったが…

「「え？」」

突如、二人の前を二つの生物が通り抜けた。

一匹は昼間のフェレットらしく身体に包帯が巻かれていた。

一匹は身体から触手の様な物が生えている明らかに普通ではない生物だった。

なのは「な…何…あれ…？」

当麻「…」

呆然とするなのはと当麻だったが、フェレットは怪物に追いかけられたままだった。

木に登るフェレットに対して木に体当たりをする怪物。

メキメキ！！

怪物の体当たりを受けた木がいとも簡単にへし折れる。

空中に投げ出されたフェレットだったが、少女がフェレットをキャ

ツチする。

フェレットをキャッチした直後の少女に、怪物は近づく。

なのは「きゃああー!!」

当麻「高町さん!!」

すかさず襲い掛かってくる怪物に、怯える少女の前に少年が出る。恐怖に震えながらも、少年は右手を突き出す。

バキン!!

少年の右手に怪物の身体が触れた途端、ガラスが割れる様な音が周囲に響き渡る。

怪物の身体の一部が欠けていた。

しかし、その欠けた部分は徐々に元通りになっていった。

呆然としているなのは手を握り、当麻はその場から全力で逃げ出していた。

怪物から逃げている最中に、すこしばかり落ち着いたなのは。

なのは「な…何なのあれ？」

当麻「分からないけど…今はとにかく逃げなきゃ!!」

少年は怪物の正体について心当たりがあったが、今は逃げることに専念していた。

フェイトの下に向かう途中で、フェレットが目を覚ました。

そして更に驚くべき出来事が発生したのだ。

何と高町なのはが抱きかかえていたフェレットが喋ったのだ。

あまりにも異常な事態に固まる二人だったが、フェレットはなのは

に話しかける。

フェレットの話の中で魔法というキーワードに少年は反応する。
間違いない。

目の前のフェレットは、フェイトやアルフと同じ魔法に関係している。

フェレットがなのはに話しかけている最中で、先程の怪物が追いついた。

再び当麻のなのはの前に出る。

そして、怪物に右手を向ける。

しかし、怪物は身体から触手を伸ばして少年の右手を避けて、身体に直撃させる。

当麻「がつ!?!」

なのは「上条君!?!」

触手に突き飛ばされた少年は、コンクリートの壁に勢い良く激突する。

そして、少年の意識は深い闇に飲み込まれていった。

第8話 少女の決意

なのは「上条君!」

コンクリートに叩き付けられて気絶した少年の下へ向かう少女。

なのは「上条君! しっかりして!」

少年を揺さぶっても起きる気配は全く無い。
そうしているうちに、徐々に迫り来る怪物。

???「くっ!」

痛みを我慢して、怪物となのはの間に割り込むフェレット。

なのはは自分達を庇うフェレットの姿を見て、一つの決意をする。

なのは「どうすれば魔法って力が使えるの?」

???「え...?」

なのは「上条君やフェレットさんにはこれ以上傷付いて欲しくないから。だから!」

???「...これを!」

なのはの言葉を聞いたフェレットは、少女に赤い石を渡す。

なのは「これって...暖かい...」

「???」それを手に持って、目を閉じて、心を澄ませて、今から僕が言う言葉を繰り返して」

なのは「う…うん！」

「我、使命を受けし者なり」

「『我、使命を受けし者なり』」「契約の元、その力を解き放て」

「えっと…『契約の元、その力を解き放て』」

「風は空に、星は天に」

「『風は空に、星は天に』」

「そして、不屈の心は」

「『そして、不屈の心は』」

「『この胸に』…！」

瞬間。

高町なのはが持っている赤い玉から、桃色の光が進る。

当麻「う…」

タイミング良く少年が目を覚ます。

「『この手に魔法を、レイジングハート、セットアップ』…！」

先程よりも、一層強い光が周囲を照らす。
怪物は少女から距離を取っていた。

当麻「眩し…」

『Stand by Lead y Set up!』

光が収まっていき少年は目を開ける。

光の中心部には、白を基本とした服に身を包み、大きな杖を持った、
高町なのはの姿があった。

当麻「フェイトと同じ…」

厳密には色々異なるのだが、目の前の少女はフェイト・テストアロツ
サと同じ魔法を扱う力を得たということを少年は理解した。

事情を知っている少年とは異なり、何も知らされていない高町なのは
は本人は…

なのは「ふえ？ …… ふええええええええええええええええ！？ こ
…これって魔法少女なの!?」

非常に動揺していた。

無理もないだろう。

単なる噂でしかなかった魔法少女に自分になれるなど、誰が想像でき
るだろうか。

しかし、怪物はそんな少女を見逃すほど慈悲深いというわけではな
く、少女に向かって突進して来た。

????「危ない!!」

なのは「きゃああ!!」

無意識に杖を正面に向ける少女。

『Protection』

かつて、上条当麻をトラックから守ってくれたフェイト・テストア
ツサが使用していた物と同じ壁が、少女の目の前に発生する。
怪物が魔力で作られた壁に激突する。

しかし、その壁は非常に頑丈らしく怪物の攻撃を全く受け付けない。
怪物の身体が削られて、周囲に飛び散り、様々な物を破壊するが、
今の少女にそのことを気にしている余裕はなかった。

再び怪物の身体が再生していく様を見て、恐怖するなのは。

その隙を見逃さなかった怪物は、不完全に回復した身体で少女に突
進してきた。

しかし、怪物の一撃は少女に当たることは無かった。

バキン!!

当麻「高町さん…大丈夫…?」

なのは「か…上条君!?!」

意識を取り戻した少年は、怪物と少女の間に割り込み、右手を突き
出して少女を怪物の攻撃から守っていた。

しかし、先程少年が受けた怪物の攻撃は思った以上に強烈だったら
しく、少年は所々出血していた。

なのは「上条君…血が…」

当麻「僕なら大丈夫…」

「???」「あれは魔力の塊なんだ！ 物理的な攻撃じゃ駄目なんだ…
魔力を減らすとかして力を弱らせてからコアを封印しないと…！」

なのは「私なんかに出来るのかな？」

当麻「大丈夫…きっと…高町さんなら…」

怪物の攻撃を受け止めている少年の声を聞いた少女は、決意した。
そして、少女は目を閉じる。

自分の呪文を見つける為に…

程なくして、少女はその呪文をみつけた。

高町なのはは瞳を開ける。彼女に最早迷いは無かった。

「『リリカル、マジカル……』」

「封印すべきは、忌まわしき器『ジュエルシード』！」

「『ジュエルシードを、封印…！』」

『Sealing mode . Set up』

なのはの杖から強烈な光が発生して、その光は怪物に直撃する。
その光は怪物を包み込み、少しずつ怪物の身体が崩壊していく。
そして、怪物の眉間にローマ数字が出現した。

「???」「今だ！」

フェレットの言葉に少年は、最後の力を振り絞りその場から離れた。

なのは「ジュエルシード、封印!!」

『Sealing』

怪物の身体は更に崩壊していき、やがてその身体は完全に消滅して、その場には宝石が残っていた。

???「……早く、杖あの宝石に触れて…」

なのは「あ……うん」

フレットの言葉に従い、なのはが杖の先端の赤い宝石で、それに触れると青い宝石に吸い込まれていった。

しかし、変身を解除した少女の災難は、終わることが無かった。

???「巻き込んでしまって…ごめん…なさい…」

当麻「なんとか…なつて…よかった…よ…」

意識を失ったフレットと上条当麻。

なのは「ふ…二人とも…!!」

どうしていいかまったく分からず、動揺するのはの前に…

桃子「なのは？」

なのは「お…お母さん!？」

家を勝手に抜け出したのはを探しに来ていた高町桃子がその場に居た。

その頃、結標真紀は端末の様な物で何者かと連絡を取っていた。

真紀「ええ…ロストログアの反応は未だに見られないわ」

「???」

真紀「分かっているわ。あれがどんなに危険なものなのか」

「???」

真紀「それじゃあね」

そう言つて、彼女は携帯端末の電源を切る。

真紀「全く…職務熱心なのは悪くないけど、堅物過ぎるのも悩みものね…」

彼女の前には一人の女性が立っていた。

真紀「この間の魔術師といい…あなたといい…この町に何かあるのは確実なだけだね」

正面の女性は杖の様なものを構える。

そして、大量の魔力弾を少女に向けて発射する。

ドオン!!

真紀「穏やかじゃないわね…」

先程とは全く異なる場所に移動していた結標真紀は、小型の機械を取り出す。

真紀「フェンリル」

『S e t u p』

少女の服装が変化する。

しかし、彼女の姿はフェイトやなのはの様な魔法少女を彷彿とさせる様な服装ではなく、どこことなく機械的な印象を与えていた。

真紀「生憎『これ』には非殺傷設定なんて便利な機能はついてないから、死んでも気にしないでね」

「???」「!?!」

女性の両手両足が、光の輪の様な物で拘束される。

真紀「ちなみにそれ…ただのバインドじゃないからね」

バリバリバリ!!

輪から発生した電撃が女性を容赦なく襲う。

「???」「!!!!!!」

そして…

ドサッ！！

真紀「全く…海鳴も物騒になったわね…まあ…学園都市ほどじゃないけど…」

結標真紀はそのまま自宅に向けて帰って行った。
その頃…

フェイト「アルフ…そっちは…？」

アルフ「駄目だ…どこにもいない…」

フェイト「当麻…一体何処に行ったの？」

第9話 大切な約束

当麻「ここ…は…？」

先程、自分が居た場所とは異なり、目が覚めた少年の視界に入ったものは見たことも無い光景だった。

桃子「目が覚めた？」

上条当麻に声を掛けたのは、高町なのはの母親である高町桃子だった。

当麻「高町さんの…お母さん？」

桃子「少し待っててね」

そう言って高町桃子は、部屋から出て行く。

当麻「あれから、一体何が…」

少年は自分の体を見る。

体には包帯が巻いてあった。

どうやら、高町家の人が治療してくれたらしい。

当麻「高町さんに迷惑掛けちゃった…」

当麻は迷惑を掛けたことに対する罪悪感を感じていた。それから少し時間が経ち、高町なのはが部屋に入ってきた。少女は、その腕にフェレットを抱きかかえていた。

ちなみに、高町桃子はその場に居なかった。

なのは「上条君…体は大丈夫？」

当麻「うん。迷惑掛けてごめんね…」

なのは「ううん。私のせいで上条君が怪我したんだから…」

当麻「そんなことは…」

なのは「本当に…ごめんなさい…ひつく…」グス

当麻「高町さん」ポン

なのは「え？」

当麻「僕が勝手にやったことだから、高町さんが気にする必要は無いよ」

なのは「でも…」

当麻「それに、高町さんがいなかったらこの程度じゃ済まなかったと思うしね」ナデナデ

なのは「う…」

当麻「だから、高町さんが気にする必要はないんだよ」ナデナデ

なのは「う…うん／＼／」

なのはの頭を撫でながら笑顔で語りかける当麻。

「???」「怪我は大丈夫かい?」

当麻「うん。君はどうなの?」

「???」「余った魔力を回復に使わせてもらったから、僕は大丈夫だよ」

フェレットの体の傷は殆ど無くなっており、少年は軽く驚く。

当麻「良かった…」

「???」「巻き込んでしまつてごめんなさい…」

当麻「気にしないでよ。僕が勝手にやったことだから」

「???」「…」

当麻「それにしても…君は一体…喋るフェレットなんて初めて見たけど…」

「???」「それは…」

フェレットは、自身の正体と目的を二人に語る。

フェレットの名前は、ユーノ・スクライアと言った。

ジュエルシードと呼ばれる宝石は、元々彼が居た世界に存在するもので、発掘作業を行っていた彼が偶然掘り起こして、別の世界に散らばってしまった物らしく、彼が一人で回収作業を行っているという話だった。

二人にその話をするときのユーノの表情は暗かった。

恐らく、自分自身の問題に魔法とは全く関係ない人間を巻き込んでしまった罪悪感があるのだろう。

なのはは、別世界の話を聞いて驚きを隠せなかったが、当麻はフェイトと既に出会っているため、そこまで驚くような話でもなかった。一連の話が終わり、少年は大切なことを思い出した。

当麻「高町さん。電話借りてもいいかな？」

なのは「え…？う、うん。構わないけど…」

少女は少年を電話の場所を教えて、少年は電話を掛ける。彼が連絡した先は、現在彼が住んでいるマンションに向けてのものだった。

『マンション』

一方その頃、フェイト・テストロッサとアルフはマンションに帰っていた。

上条当麻を探していた二人だったが、結局少年を見つける事が出来ず、アルフに少年がマンションに帰っているのかも知れないと言われたフェイトは、一旦マンションに戻ることに決めた。

しかし、マンションに少年は帰っておらず、再びマンションを出て少年を探すことを決めた二人だったが…

P r r r r ! !

フェイト「電話？」

アルフ「こんな時間に誰なんだ？」

不審に思いながらも、受話器を取るフェイト。

フェイト「どなた様ですか？」

当麻「もしもし…フェイト？」

フェイト「当麻!？」

アルフ「当麻なのかい!？」

驚く二人だったが、少年から何があったのか説明される。
ジュエルシードの暴走によって生まれた怪物に襲われて気絶して、
クラスメートの子の家にお世話になっていることらしい。

当麻「ごめんね…迷惑掛けて…」

フェイト「ううん…当麻が無事でよかった…」

当麻「それじゃあね…」

フェイト「うん…」

通話が終了してフェイトは受話器を置く。

フェイトとアルフは当麻と別行動を取っていたことを後悔していた。
もし、その場に自分がいれば少年が怪我をすることがなかった。

フェイトはそのことに心を痛めていた。

フェイトとアルフに連絡を終えた少年は、再び部屋に戻った。

ユーノ「連絡は終わったの？」

当麻「うん。高町さん。手間掛けさせちゃってごめんね」

なのは「ううん。気にしないで」

当麻「それじゃあ。僕は帰るから」

なのは「え？」

当麻「あまり長居するわけにもいかないだろうし」

なのは「でももう夜中だし…」

桃子「なのはの言う通りよ上条君」

高町桃子が部屋に入ってくる。

ユ一ノは、話している所を知られるわけにはいかない為黙っていた。

当麻「で…でも…」

桃子「それに夜中は何かと危険だからね」

当麻「迷惑を…」

少年が言い終える前に、高町桃子が上条当麻を優しく抱きしめる。

桃子「無理しなくていいのよ…」

抱きしめられて驚く少年だったが、懐かしい感覚を思い出し、そのまま眠りについた。

翌日、本日は小学校が休日ではなかったのだが、なのはの両親が学校に少年が休むとの連絡を入れてくれた。

当麻「本当にありがとうございました」

桃子「本当にいいの？無理しないほうがいいわよ？」

当麻「大丈夫です」

少年は結局、高町家で泊まった後にマンションに帰る事にした。

桃子「気をつけてね」

当麻「はい」

マンションに帰宅した少年は、フェイトとアルフに再開する。

フェイト「当麻！」

アルフ「大丈夫かい！？」

当麻「うん。迷惑掛けてごめんね」

フェイト「ううん…私がしっかりしてれば…」

当麻「そんなことないよ」

アルフ「当麻の言うとおりだよフェイト。当麻も無事だったんだし」

フェイト「そうかな…？」

場の雰囲気切り替える様に、上条当麻はフェイトとアルフに一つの頼みごとをする。

当麻「いきなりだけど、二人にお願いがあるんだ」

フェイト「お願い？」

アルフ「なんだい？」

当麻「僕に戦い方を教えて欲しいんだ」

「「え？」」

予想外の申し出に動揺するフェイトとアルフ。

当麻「二人の足を引っ張りたくないんだ。それに……」

フェイト「それに？」

当麻「フェイト達に無理して欲しくないから……」

厳密には、フェイトとアルフだけではなく、高町なのはとユーノ・スクライアも含まれていた。

ジュエルシードの問題を、同じ年の少女に任せることは少年にとって我慢出来ないことだった。

だからこそ、少年は彼女達の負担を軽くする為に二人の少女に戦い方を教わることを決めたのだ。

強い決意を宿した少年の瞳を見たフェイトとアルフ。

フェイト「分かったよ。だけど今日は休まなきゃ」

アルフ「そうだよ。この状態じゃ戦い方を教えることなんて出来ないよ」

当麻「うん」

二人の言葉に従い、本日はマンションで休養を取ることにした上条当麻だった。

その頃、浜面仕上は海鳴市をぶらついていた。

仕上「暇だな」

今日は、上条当麻が休みということもあり、当麻を誘って遊びに行くつもりだった浜面は暇になったのだ。

仕上「なんか面白いモンでもないかな？」

少年が海鳴の公園を通りがかった時、公園のベンチに目を開けたまま、微動だにしない少女の姿を見つけた。

仕上「何やってんだあいつ？」

明らかに目立っている少女を見つめている浜面だったが、少女の体が少しずつ傾いていき…

ドサー！！

仕上「お、おい！？」

少年は慌てて少女の下に駆け寄る。

仕上「大丈夫か!？」

少女に声を掛けるが、返事はない。
救急車を呼ぶ為に、急いでその場から離れようとしていた少年だったが…

???「グー…スカー…ピー…」

仕上「グースカーピー？」

再び少女に近づく。

仕上「何だよ…寝てるだけじゃねえか…」

拍子抜けした少年は盛大な溜息をつく。

少年の溜息で目が覚めた少女は、寝ぼけ眼で周囲をキョロキョロ見回して…

???「南南西から電波が来てる…」

仕上「はあ…？」

少女が話している内容が全く理解できない浜面仕上。

???「あなたは？」

少年に気付いた少女は、少年の顔をじっと覗き込む。
仕上は内心ドキドキしながら、少女の質問に答えた。

仕上「お前が意識を失ってると思って近づいたんだよ。救急車を呼ばうとしたら、寝てるだけだったとは思わなかったけどな…」

???「そう…」

仕上「そっいゃ…ここらじゃ見ない顔だけど…」

???「私は…海鳴に来るのは初めてだから…」

仕上「そうなのか…よし!!」

突然何かを思いついた少年は、少女の方を向いて笑いながら。

仕上「ならこの俺が海鳴を案内してやるよ!」

???「いいの…?」

仕上「かまわねえって!そんじゃあ行こうぜ!!」

少年は少女の手を握り、その場から駆け出した。

少女の名前は滝壺理后と言った。

それから、少年は少女の海鳴を案内していた。

案内というよりはデートに近かったが、二人ともデートという認識はこれっぽっちもなかった。

少年が案内した場所は、ゲームセンターや翠屋などだった。

ゲームセンターで遊んだ際に、少年はUFOキャッチャーをして馬のぬいぐるみを取って少女にプレゼントした。

翠屋に到着した際は、高町家の人々にニヤニヤされながら見られていた。

少女は基本的に無表情だったが、少年に案内されていたときは、しばかり笑顔が見えた気がした。

少年も最初は、単なる暇つぶしのつもりだったが少女と一緒にいる時間を楽しいと感じていた。

再び二人が出会った公園に戻った。

浜面仕上は滝壺理后と一緒に居るうちに様々な話を聞いた。

少女は学園都市に向かう途中で、海鳴市に立ち寄ったらしく、公園で昼寝していたときに少年と出会ったらしい。

学園都市に憧れを持っている少年だったが、この前に高町なのはと月森すずかから聞いた話を思い出す。

学園都市に行ったら、学園都市の外に出るだけでも大変な手続きが必要になるということ。

超能力という物を手に入れるために脳を開発するということ。

一緒に遊んだ少女が、そんな遠い場所に行ってしまうことを実感する。

理后「そろそろ行かなきゃ…」

仕上「そうか…」

理后「今日は楽しかったよ。ありがとではまづら」

仕上「俺も楽しかったよ。ありがとな滝壺」

理后「じゃあ…さよなら…」

少女は少年の下から立ち去っていく。

どんどん離れていく少女の後姿を見ていた少年は、全力で叫んだ。

仕上「またな！！また遊ぼうぜ！！滝壺！！」

少女の足が止まり、少年の方を向く。

理后「ありがとね…はまづら…またね…！」

滝壺理后の姿が見えなくなっても、浜面仕上は手を振り続けた。

第10話 少年の特訓

『私立聖祥大附属小学校』

仕上「はあ…」

当麻「浜面？どうしたの？」

アリサ「朝からこの調子だから放っておいたほうがいいわよ」

溜息をついている仕上を心配した当麻が声を掛けるが、アリサに止められる。

当麻の言葉に反応しない少年だったが、仕上が溜息をついている理由は先日、彼が出会った滝壺理后という少女が原因であった。

すずか「でも…浜面君、一体どうしたんだろうね？」

アリサ「さあ…浜面が何考えてるかなんて分かるわけないでしょ」

なのは「体調でも悪いのかな？」

当麻「どうなんでしょう？」

なのは「そういえば…上条君。身体は大丈夫？」

当麻「大丈夫だよ。ありがとう高町さん」ニコ

なのは「う…うん…／／／」

少女の顔が少しばかり赤かったが、鈍感な少年がそのことに気付くことはなかった。

仕上「学園都市かあ…」

すずか「学園都市がどうしたの？」

アリサ「学園都市にでも行きたいわけ？」

仕上「まあ…会いたい奴がいるんだけどさ…」

当麻「学園都市に友達でも居るの？」

仕上「まあな」

なのは「そうなんだ」

浜面仕上の友人が学園都市に居るということを始めて聞いた一同だったが、それほど興味があるわけではないのか、その事について言及する気は無かったらしい。

子萌「学園都市がどうしたんですか？」

学園都市の話をしていた少年少女達の下に、担任の月詠子萌がやって来た。

なのは「浜面君の友達が学園都市に居るといっ話をしていたんですよ」

子萌「そうだったんですか。もしかしたら、先生が浜面ちゃんのお友達に出会ったかもしれませんね」

上条「子萌先生は学園都市の先生でしたよね」

子萌「そうなのですよ」

アリサ「先生以前に大人っていうのが納得できないけど…」

すずか「ア…アリサ…」

子萌「だから私はれっきとした大人なのですよ！」

アハハ！！

何気ないやり取りをして、平凡な一日を過ごす少年達と少女達。

『マンション』

授業が終わって、上条当麻は早速マンションに帰った。

今日は、フェイトとアルフに戦い方を教えてもらって約束した日だった。

当麻に戦い方を教えると約束したフェイトとアルフだったが、少年用のデバイスなど所持していなかったし、少年が自分達のように戦えるわけではないと理解していた。

ゴーレムと対峙した時の服装になっているフェイト。

ちなみに、少女が身に纏っている服はバリアジャケットと言っらしい。

『Protection』

少女は魔力で構成された障壁を作り出した。

フェイト「当麻。右手であの壁に触れてもらってもいい？」

当麻「うん」

フェイトが何故いきなり障壁を作り出して少年の右手で触れるように指示したのかと言うと、それは、ゴーレムと戦った際に少年の右手がゴーレムに触れた際に、ゴーレムの身体の崩壊したことからなんらかの魔力を打つ消すことがあるのではないかと推測したからだ。少年の右手が障壁に触れた途端…

バキン！！

ガラスが割れる様な音が周囲に響き渡り、障壁は跡形もなく消滅した。

当麻「え？」

アルフ「バリアが消えた？」

少年は、ゴーレムやジュエルシードの暴走によって生まれた怪物との戦いでも右手を無意識に突き出していたが、自分の右手にこのような力が宿っているとは知らなかったのだろう。

フェイト「（やっぱり…）」

少年が障壁を打ち消した場面を見て、フェイトは一つの確信をする。

フェイト「当麻とアルフが握手してもらってもいいかな？」

アルフ「ああ」

当麻「うん」

フェイト「言い忘れていたけど、当麻は右手で握手してね」

当麻「分かったよ」

ガシッ！

アルフ「あれ？何だか力が抜けていく？」

フェイト「もういいよ」

アルフと当麻は握手をやめる。

フェイト「もう一度握手してもらっていいかな？当麻は今度は左手でお願い」

再び握手をする二人。

フェイト「アルフ。何か違和感みたいなものはある？」

アルフ「いや…無いけど…」

当麻「どうしたのフェイト？」

アルフと握手させた意図が分からず、質問する当麻。

フエイト「多分なんだけど…当麻の右手には魔法の力を打ち消す力が宿っているんだと思う」

当麻「魔法を打ち消す力？」

アルフ「それって…アンチマジックグロープ A M G みたいな物かい？」

フエイト「そうだと思うけど…」

当麻「そんな力があるなんて…」

自分の右手に魔法を打ち消す力があることに驚きを隠せない少年。しかし、右手にその力が宿っていなければゴーレムの戦いで確実に命を散らしていた。

それが、少年にとっての幸運か不幸かは誰も知る由がない。

フエイト「じゃあ早速、特訓を始めるけどいいかな？」

当麻「うん。よろしくお願いします！」

特訓の内容は、フエイトが放った魔力弾を打ち消したり、アルフに近接戦闘を習うといったものだった。

少年が特訓をしている頃、高町なのははユーノ・スクライアと一緒に海鳴市を歩き回り、ジュエルシードの搜索を行っていた。

ユーノの話を聞いたなのはは、彼に協力してジュエルシードの搜索に当たることを決めた。

なのは「（見つからないね…ジュエルシード…）」

ユーノ「（そう簡単に見つかるような物じゃないからね…）」

念話で会話する二人。

喋るフェレットと会話している所を、見られるわけにはいかないの
でこのような形で会話することになった。

なのは「見つからないなあ…」

真紀「どうしたの君？」

なのは「え？」

困っている様子の高町なのはに声を掛ける結標真紀。

真紀「何か困っているようだったから…」

なのは「にやはは。すいません。大した事じゃないんです」

真紀「そう？ならいいけど…」

なのは「心配してくれてありがとうございます」

真紀「いえいえ。困ったときはお互い様だからね」

結標真紀と別れる高町なのは。

真紀「（あれは…念話か…あの子は…）」

それから、ある程度の時間が過ぎて高町なのははジュエルシードに
よって、怪物化した犬と戦っていた。

始めの頃に比べて、スムーズに変身できた上に順調にジュエルシードを封印することが出来た。

そんな少女の様子を離れたところから見ている真紀の姿があった。

真紀「あの子も魔導師か…全く…厄介な事になりそうね」

ヒュン！！

音も無くその場から消える結標真紀だった。

翌日、上条当麻のマンションに少年宛に差出人不明の手袋が送られて来た。

フェイトとアルフにその手袋を見せる当麻。

当麻「これってどういうことなんだろう？」

アルフ「何で右手用だけしかないんだよ…」

当麻「誰が送ったのか全然分からないし…」

フェイト「もしかして…この手袋を送った人は当麻の右手について何か知っている人なのかもしれないね」

当麻「そうなのかな？」

アルフ「確かに…そうじゃなきゃ右手用しかない手袋なんてただの嫌がらせだろ？」

当麻「そうだね…」

フェイト「でも…誰が何の為に…」

アルフ「それは分からないけど…とにかく、せっかくだから試してみようよ!」

アルフの提案に乗った当間は早速、手袋を着けてアルフと握手する。

アルフ「やっぱり…力が抜けない…」

手袋を着けている状態だと、少年の力が発動しないことを理解した一同。

しかし、誰が何の為にこの手袋を送ったのかその理由が分かる者はその場に居なかった。

その頃…

???「うっ…お腹が超空きました…」

一人の少女が海鳴市をうろついていた。

第11話 歪んだ奇跡

???「孤児院を抜け出したのはいいんですが…お腹が超空きました…」

海鳴市をふらふらしながら歩く少女は、どうやら家出をしているようだった。

少女が居た孤児院は、別に子供達に対して非人道的な行いをしていない訳ではない。

しかし、孤児院に居る子供達の中でもとりわけ活発だったこの少女に、そこでの生活は耐えられるものではなかったらしく、こうして孤児院を抜け出したのだ。

???「それにしても…ここは海鳴の何処なんでしょうか？」

基本的に外出を禁じられている為、少女は現在自分が歩いてる場所が海鳴のどこか全く把握出来ていないようだった。

しかし、運良く少女は少年と少女を見つける。

???「丁度いいですね。ここが海鳴のどこなのか尋ねてみましょう」

恋人同士の様な雰囲気を感じ出している少年と少女だったが、生憎幼い少女にはその機微を感じることなど出来ない。

少年が少女に宝石の様な物をプレゼントしようとする場面で、少女は二人に近づいていくが、突然少年が少女に渡そうとした宝石が強い光を放つ。

???「え…」

そして、光が収まった頃…

少年と少女が居た場所には巨大な木があった。更に、その周辺には巨木の根っこの様な物が生えていた。

???「ええええええええ！？超何なんですかあああ！！？」

少女は目の前の異常事態にただただ絶叫していた。

少し前…

高町なのはとアリサ・バニングスと月村すずか、上条当麻と浜面仕上の五人はサッカーの試合観戦をしていた。

今日は地元の少年達による試合があつたらしく、高町なのはの家族に誘われてこうして試合を眺めていたのだ。

アリサ「浜面と上条はサッカーをしないの？」

仕上「ああ…」

上条「僕はサッカーをしたことがないから…」

試合が終了して、一同は翠屋に集まった。

ちなみに先程試合をしていたチームである翠屋JFCのメンバーも招かれていた。

ケーキをご馳走になる少年少女達。

仕上「それにしても…こいつも元気になったみたいだな」

ワシャワシャ！！

ユーノ「キュー！」

テーブルの上に乗っているユーノを浜面が触る。

すずか「そうだね。元気になってよかったよ」

アリサ「ずるいわよ浜面！私にも触らせなさい！」

ユーノを取り合うアリサと浜面。

そんな二人の様子を見ながら微笑む三人。

仕上「そついや結局こいつは上条じゃなくて高町が飼う事になったんだよね？」

なのは「うん。家の人も気に入ってくれたし…」

少年少女達が話している間に、翠屋JFCのメンバーはケーキを食べ終えたらしく、高町四郎に挨拶をして帰っていく。

なのは達も彼等を見送ろうと、店の外に出た。

彼等が見送っていた一人の少年が、バッグの中から小さくて輝いている宝石みたいなものを取り出して、ポケットの中に入れた。

それを偶然見た当麻となのは。

当麻「（あれって…まさか…ジュエルシード？）」

なのは「（あの子…気のせい、だよな……）」

彼等を見送った一同。

当麻「ごめん。ちょっと用事が出来たからまた明日」

一同と別れた少年は、先程の少年を急いで追いかけた。少年が何処に行ったのか分からない当麻だったが、運良く少年を見つけることが出来た。

丁度、少年が少女にジュエルシードを渡そうとしている場面だった。彼等の近くには一人の少女も居た。

急いで少年と少女の下に走るが時既に遅く…

ジュエルシードから発生した光が少年と少女を包んだ。

当麻がメンバーと別れてから、解散したなのは達。

なのはとユーノは、本日もジュエルシードの搜索に勤しんでいた。少女は先程の少年が持っていた寶石に疑問を感じていたが、少年に言及するようなことはしなかった。

そして、突如ジュエルシードの暴走を関した二人は、一旦ビルの上に移動した。

高町なのはとユーノ・スクライアはジュエルシードの暴走によって引き起こされた暴走を目の当たりにした。

街中の至る所に張り巡らさせた巨大な木の根。

そして、街の中心部に存在する巨木。

なのは「これって…」

ユーノ「たぶん人間が使ったんだと思う。不完全でもジュエルシードは人間の願いによって凄まじい力を発揮するから……」

なのは「そんな……私のせいだ……あの時ちゃんと調べてれば……」

しかし、少女が後悔しても状況が好転するわけではない。

その頃、ジュエルシードの暴走の中心部に居た上条当麻と少女は…

「超訳が分かりません!!」

当麻「お…落ち着いて…」

「これが落ち着いていられますか!？」

軽いパニックに陥った少女を落ち着かせる上条当麻。

巨木も近くに居る二人の存在に気付いたのか根っこを伸ばして二人に攻撃を加える。

「きゃあああ!!」

巨大な木の根が襲い掛かってくる。

そんな物が直撃すれば無事で住む筈がない。

少女は無意味と知りながらも、頭を抑えてうづくまる。

しかし、巨木の根が少女に直撃することは無かった。

バキン!!

少年の右手に触れた木がいとも簡単に消滅する。

「え…?」

何が起きているのか全く理解できない少女。

当麻「とにかくここから離れるよ!!」

ガシ!!

少年に手を掴まれて動揺する少女だったが、いち早く落ち着きを取り戻した少女は…

???「分かりました!!」

少年と少女はその場から全力で逃げ出した。
襲い掛かる根っこは右手で打ち消しながら、ある程度離れた場所に移動することに成功した二人。

当麻「怪我は無い？」

???「は…はい。大丈夫です」

当麻「良かった…」

呼吸を整える二人だったが、そんな二人は近くに一人の少女が居ることに気付く。

当麻「高町さん！」

なのは「え…？上条君？」

当麻はなのはに声を掛ける。

ちなみに、少女はバリアジャケット姿であり一般人から見れば、コスプレでもしているのかと勘繰られそうだが、今はそんなことを言っている場合ではなかった。

なのは「どうしてここに？」

当麻「高町さん！この子をお願い！」

そう言つて少年は傍らにいる少女に話す。

なのは「上条君は何処に行くの！？」

当麻「ジュエルシードの暴走の巻き込まれた子が居るんだ！」

ダッ！！

そう告げた少年は、再び暴走の中心部へ向かつて行つた。

止める間もなく少年の姿を、呆然と見ていることしか出来なかった少女。

???「それってコスプレですか？」

なのは「え！？えゝつと…これは…」

予想だにしない質問に動揺するのはだったが、ユーノに念話で話し掛けられる。

ユーノ「（なのは！！早く彼を追いかけないと！）」

なのは「（う…うん！）」

ユーノの言葉を聞いたなのは…

なのは「ちょっとここで待ってもらえるかな？」

???「…はい…」

なのは「ごめんね！すぐ戻るから！」

高町なのはも上条当麻を追って、暴走の中心部へ向かった。
巨木の根元に辿り着いた少年は、巨木の根に阻まれて先に進めず
いた。

当麻「くっ……」

バキン！！

少年は行く手を阻む根を打ち消しながら進もうとするが、所詮は単なる小学生でしかない当麻は体力を相当消耗していた。

ビシュ！！

少年に向かって突撃してきた根が頬を掠める。

そこから血が滴り落ちていた。

しかし、少年がその程度で諦めない。

他人の不幸を許さない少年だからこそ、彼は拳を握るのだ。

当麻「はぁ…はぁ…」

ドッ！！

一気に大量の根が少年に向かって伸びてきた。

右手一つしか対抗手段の無い少年に、この攻撃が防ぎ切れるわけではない。

恐らく、この一撃が少年に当たれば命を失う可能性は非常に高いだろう。

しかし、少年はその様な状況でも前に進み続けた。

そして、大量の根が少年に当たる直前…

謎の光が巨木に突き刺さった。

その光は、巨木の中の少年と少女が閉じ困られている繭を正確に貫いた。

少年を貫こうとしていた根は動きを止めて、徐々に消滅していった。

当麻「あの子達は…」

少年が周囲を見回す。

そこには、少年と少女が倒れていた。

外傷は無く、無事な姿を確認できた少年は安堵した。

当麻「良かった…」

???「超大丈夫ですか!?!」

当麻の下に駆けつけた少女。

続いて、なのはとユーノもその場に現われた。

なのは「上条君…」

なのはは当麻の姿を見て後悔する。

所々傷を負っており、頬からは血が流れていた。

なのは「ごめんなさい…私があの時気付いていたら…」

もし、少年が所持していた宝石について問い詰めていたら、このような事態には陥らなかった。

当麻「ううん…僕はあれがジュエルシールドだって気付いて行動してたのに…結局僕だけじゃ二人を助けられなかった…」

なのは「でも…上条君は…」

上条当麻は右手以外は普通の小学生であり、高町なのはの様に魔法の力を持っているわけではない。

当麻「高町さん…」

なのは「ごめんなさい…」

上条当麻も高町なのはもフェイト・テストロツサも年相応の子供らしくなく、自分で全てを背負い込もうとする性質の人間である。

当麻「高町さん…僕もジュエルシードの搜索を手伝うよ…」

なのは「え？」

少年の突然の申し出に動揺する少女。

当麻「一人だったら出来ないことでも二人だったら何とか出来るかもしれない」

なのは「でも…」

当麻「それに、僕の右手には魔法を打ち消す力があるらしいんだ」

なのは「魔法を打ち消す力？」

当麻「それなら、僕でも力になれると思うから…」

なのは「…」

当麻「僕はただ…誰かに不幸になって欲しくないだけだから。それに高町さんには笑っていて欲しいからね」

なのは「上条君…本当にいいの？」

当麻「うん」

上条当麻は高町なのはに無理をさせない為に、ジュエルシードの捜索に協力することを決めたが、高町なのはとフェイト・テストアロツサがジュエルシードを集める理由は決定的に異なっている。

そのことを理解しても、高町なのはを放っておくことが出来なかった少年だった。

???「超放つたらかしです…」

そして、先程から二人に放っておかれていた少女は少しかり不機嫌だった。

一方その頃、ビルの屋上から結標真紀は海鳴を眺めていた。

真紀「やっぱり…ロストログアは危険ね…そろそろ連絡を入れようかしら…」

端末を起動して『』に連絡を入れようとする少女だったが…

バン！！

銃弾が端末に直撃して破壊される。

真紀「狙撃か…」

周囲に人影は全く無く、今の銃撃は遠距離から放たれたものであると推測する少女。

真紀「誘っているのかしら…」

破壊されたのは端末だけで、少女に向けて銃弾は撃たれていない。

ヒュン！！

少女は無言でその場から消えた。

真紀「駆動鎧…」

「……」

先程の銃弾を放ったと考えられる場所に移動した少女は、五体の駆動鎧を見つけた。

真紀「学園都市の暗部か…狙いはロストログアと私の処分って所でしょっね…」

「……」

少女の問いに答えるつもりがないのか、駆動鎧は少女に銃口を向けてくる。

真紀「まあいいわ…さっさと…」

駆動鎧の一体が小型の機械の様な物体を取り出す。

そして…

キィインー！！

真紀「な…あ…！？」

小型の機械から発生した音を聞いた少女は、突然苦しみ始める。

真紀「頭が…くう…！」

謎の激痛でまともに立っていられる状態でない少女に、駆動鎧は一齐に銃口を向ける。

しかし、その銃口が火を噴くことはなかった。

ズガアア！！

一瞬で全ての駆動鎧が地面ごと切り裂かれる。

非常に頑丈な筈の駆動鎧を易々と切り裂かれて、呆然とする結標真紀。

痛む頭で少女が見たのは、黒髪で長身の身の丈以上の刀を背負った少女だった。

第12話 新たな出会い

高町なのはと上条当麻がジュエルシードの暴走によって生み出された怪物と戦っていた頃、フェイト・テストアロツサとアルフもジュエルシードの暴走によって生み出された怪物と戦っていた。

怪物に苦戦することも無く、ジュエルシードを封印することに成功する二人。

少女が居た場所は、海鳴市の中心部から遠く離れており、巨木の根による被害は無かった。

マンションに向けて移動していた二人だったが、そこで予期せぬ人物に出会う。

はやて「あれ？」

フェイト「君は…」

アルフ「あの時の…」

フェイトとアルフは八神はやてに出会う。

どうやら、彼女は図書館から帰っている途中らしかった。

アルフ「あの弁当とっても美味かったよ！」

はやて「気に入ってくれた様でなによりや♪」

フェイト「本当にありがとうね。…ええと…」

お互いに自己紹介していなかったことに気付く三人。
彼女達が出会ったのは、ゴーレムとの戦いのみであり、少女を自宅

に送った際もお互いに自己紹介をするのを忘れていたのだ。

はやて「自己紹介してへんかったな。八神はやてや」

フェイト「フェイト・テストロッサだよ」

アルフ「あたしの名前はアルフだ」

はやて「フェイトちゃんにアルフちゃんか。ええ名前やね」ニコ

フェイト「あ…ありがとう…／／／」

アルフ「あんたもいい名前だよ」

はやて「おおきに」

お互いの自己紹介を終えた三人。

フェイト「あの弁当のお礼に何か出来ることないかな？」

弁当のお礼に何か出来ることはないかとはやてに尋ねるフェイト。

はやて「お礼なんてそんな…」

アルフ「遠慮なんてしなくていいんだよ」

フェイト「そうだよ。何でも言って」

フェイトとアルフの申し出に動揺した少女だったが、何かを考え込んだ後…

はやて「せやな…二人とも私の家に来てもらってもええか？」

フェイト「いいけど…」

アルフ「何をすればいいんだい？」

はやて「それは家に着いてからや」

何を手伝えばいいのか全く分からない二人だったが、そのまま少女について行った。

そして、一行は一軒家の前に到着する。

はやて「ここが私の家や」

少女に案内されて、家にお邪魔する二人。

そんな二人に少女が頼んだことは、料理の味見をして欲しいというものだった。

予想外の申し出に、本当にそれでいいのと聞くフェイトだったが、少女はそれで十分だと告げた。

自宅で色々な話を話す内に、フェイト・テストロッサとアルフは八神はやてに両親が居ないという事を知る。

上条当麻と同じ境遇の少女。

そのことを知ったフェイトの雰囲気が若干暗くなるが、アルフが無理やりその場を盛り上げた。

慌てるアルフの姿を見て微笑むはやてと苦笑いするフェイト。

フェイトとアルフに料理を振舞うはやて。

自分の作ってくれた料理を絶賛してくれた二人に、少女は内心感謝していた。

一軒家でずっと一人で過ごしてきた少女にとって、この瞬間はとて

も新鮮で幸せだった。

一方その頃…

???「こほけーひ…超おいひいでふね…」

当麻「そんなに急いで食べなくても…」

なのは「にやはは…」

少女はケーキを頬張っていた。

少し前、上条当麻と高町なのはに放ったらかしにされていた少女は二人に声を掛けようとしたが…

グ~~~~~!!!

盛大にお腹の音が周囲に鳴り響いた。

顔を真っ赤にする少女に気付いた二人。

気の毒に思った当麻は、先程貰ったケーキを少女に差し出した。目にも止まらぬスピードでケーキを少年から受け取った少女は、そのままケーキにがつついた。

???「ご馳走様でした!」

当麻「よっぽどお腹が空いてたんだね」

なのは「大丈夫?」

???「大丈夫です!」ニカッ

二人に笑顔を見せる少女。

当麻「良かった…」

???「おっと…聞き忘れる所でした。ここは海鳴の何処ですか？」

なのは「え…？」

予想外の質問に戸惑う二人。

当麻「海鳴には初めて来たの？」

???「いえいえ。私は海鳴出身ですよ？」

なのは「ならどうして…？」

???「孤児院から外出しちゃいけないって超言われてましてね」

当麻「孤児院？」

なのは「（ということは…この子は…）」

???「退屈なので抜け出して来たんですが…」

当麻「さっきの騒ぎに巻き込まれたってこと？」

???「その通りです…」

なのは「災難だったね…」

当麻「孤児院を抜け出して来たって言うけど、どこか行く当てはあるの？」

????「いえ…全く…」

当麻「もし良かったら僕の家に来ない？」

「「え？」」

当麻「僕は一人暮らしだから一人増えても問題ないから…」

????「そんなこと言って…超変なことをするつもりじゃないですか？」

当麻「し…しないよ！」

????「冗談ですよ。でも…本当にいいんですか？」

当麻「うん」

????「それでは、お言葉に甘えさせていただきます」

少女は少年のマンションと一緒に生活することが決めた。
そんな二人を見ていた高町なのは…

なのは「…む…」

当麻「高町さん？どうしたの？」

なのは「…何でもない…」

少しばかり不機嫌だった。

???「そういえば…まだ名乗ってませんでしたね。絹旗最愛です」

当麻「上条当麻だよ」

なのは「高町なのは。よろしくね」

最愛「上条に高町さんですね。よろしくお願いします」

当麻「さっきから『超』って言ってるけど…それは一体どついつ…」

最愛「口癖ですけど…変でしたか…?」

当麻「いや…可愛いと思うけど…」

最愛「そ…そうですか…／＼／」

なのは「…うゝ…」

当麻「高町さん?」

なのは「…上条君の馬鹿…」ボソ

海鳴の中心部から少し離れたビルの屋上。

黒髪で長身の少女は、あまりにも不釣り合いな日本刀を背負っていた。

神裂火織

天草式十字凄教の女教皇である少女は、ビルの屋上に佇んでいた。

神裂「私は…どうしたら…」

少女は、天草式十字凄教の女教皇という立場を捨てて、日本中を一人で旅していた。

少女は世界に20人しか存在しない『』の一人で、生まれつき神の加護による強運を持つがそれが周囲の人間に不運を与えていると考えて、女教皇という立場を捨てたのだ。

自分の進む道を見失い、途方に暮れていた彼女に近づく影があった。

???「おゝこんな所に居たのかにやゝ」

神裂「何者です？」

少女の近くに居たのは、金髪の少年だった。

どうやら、髪は染めているが年は小学三年生位だった。

???「そんなに威圧して欲しくないぜい。天草式十字凄教の女教皇さんよ」

神裂「っ！？どうしてそれを!？」

???「必要悪の協会。そう言えば分かるかにやゝ」

神裂「魔術関連の事件捜査や、魔術師・魔術結社の殲滅・処分を任務とする対魔術専門国際治安維持機関…」

パチパチ！

「……」

わざとらしく拍手する少年。

神裂「そんな組織が私に何の用ですか？」

「……」単刀直入に言わせてもらっぜい。神裂火織。必要悪の協会に所属しろ」

少年の纏っていた空気が一変する。

神裂「それはどういっ……」

「……」必要悪の協会が処分対象とする魔術師がどっこの奴かは知っているな？」

神裂「ええ……」

「……」そういう奴等を放っておくことが、何を引き起こすかも知っているだろう？」

神裂「……分かりました」

「……」話の分かる奴で助かるぜい。俺の名前は土御門元春だ。よろしくな」

自宅に帰った結標真紀は、予備の端末を取り出して『』に連絡を入れた。

激しい頭痛を引き起こした謎の機械と、自分を助けてくれた長髪の少女。

解決していない問題は多々あるが、一旦はジュエルシードの問題について報告するべきと考えて、端末を起動した。

『?????』

????「やはり…」

????「海鳴市ね…」

????「でも…あの世界は…」

????「ええ…だからこそ私達は慎重に動かなければならないわ」

????「しかし…!」

????「落ち着きなさい。この世界は表面上は平和だけど、その裏は非常に危険よ」

????「…」ギリ!

????「一旦、上層部に報告しますね」

????「お願いね」

マンションに帰宅したフェイトとアルフ。

八神はやての所で食事をご馳走になっていたことを上条当麻に伝える為に、少年の部屋に入る二人。

ちなみに、部屋の合鍵は少年が事前に渡していた。しかし、少女達を出迎えたのは上条当麻ではなく…

最愛「超お帰りなさい!!」

フェイト&アルフ「誰!？」

絹旗最愛だった…

第13話 『幸運』と『不幸』

『マンション』

上条当麻の部屋に見知らぬ少女が居る事に動揺するフェイトとアルフだったが、我に帰ると料理を作っている少年の所まで近づき、問い詰めた。

その時、フェイトが黒いオーラを纏っていたが、少年はそのことに気付かなかった。

フェイトとアルフに問い詰められ、少女についての説明をする上条当麻。

アルフ「なるほどね」

フェイト「…そうだったんだ…」

説明を聞き終えたフェイトは、少しばかり不機嫌だった。

フェイト「…全く…当麻は…」

最愛「もしかして…超お邪魔でしたか…」

黒いオーラを放っているフェイトに声を掛ける絹旗最愛。

フェイト「ううん。そんな事無いよ」

最愛「もしかして上条の彼女ですか？」

「」「え?」「」

最愛「違うんですか？」

フェイト「そんな…私は…当麻とは…あう…／／／」

顔を真つ赤にしながら口籠るフェイト・テストロッサ。

アルフはそんなフェイトの姿を見て苦笑いする。

当麻「フェイトは彼女じゃないよ」

あつさりと絹旗最愛の言葉を否定する上条当麻。

その言葉を聞いて、この世の終わりの様な顔をするフェイトと盛大な溜息をつくアルフ。

当麻「そもそも彼女なんて僕に出来るわけが無いし…」

フェイト「…」

アルフ「トウマ…あんたって奴は…」

当麻「とにかく、僕は料理を作っておくから皆はリビングで寛いでね」

最愛「了解です！」ビシッ！

アルフ「はい！」

フェイト「当麻。私とアルフはやての所でご飯をご馳走になったんだけど…」

当麻「そうなの？…でも少しくらい食べても良いんじゃない？」

アルフ「そうだよフェイト」

アルフは正直食べ足りなくて、少年の言葉に賛同する。

フェイト「それもそっか。せっかく作ってくれたのに食べないのは悪いしね」

最愛「そうですよ！皆で食べたほうがご飯は美味しいですから！」

元気一杯の少女の態度に微笑む三人。

少年は調理を再開して、フェイトとアルフと最愛は三人で話していた。

出会って間もないというのに、アルフと最愛はとても仲良くなっていた。

精神年齢が近いからなのかもしれないとフェイトは考えた。

最愛「その耳はコスプレなんですか？」

アルフ「これは「アルフ」コスプレって奴だよ…」

最愛「海鳴ではコスプレが流行ってるんですかねえ…」

絹旗最愛が昼に出会った高町なのはの姿といい、アルフの犬耳とい
い事情を知らない人から見ればコスプレをしている様にしか見えな
いだろう。

当麻「出来たよ」

彼女達が話している内に料理が完成したらしく、お皿を並べる。

「「「いただきます!」「」」」

当麻の手料理を始めて食べた最愛は…

最愛「超美味しいですねこれ!」

当麻「ありがとう」

アルフ「ハヤテの料理も美味いけど、トウマの料理も美味いよ」

フェイト「私もそう思うよ」

彼女達に褒められて少年は、照れながら頭を掻く。

凄まじい速度でご飯を食べる最愛とアルフ。

その豪快な食べっぷりを見て、若干顔が引き攣る当麻とフェイト。

「「「「ご馳走様でした!」「」」」」

夕食を食べ終わり、食器を片付ける一同。

そんな中、上条当麻は絹旗最愛が寝る場所について考えていた。

当麻「（絹旗さんはベッドでいいのかな?）」

食器の片づけを終えた上条当麻。

フェイト「おやすみなさい当麻」

アルフ「また明日ね」

隣の部屋に帰ろうとするフェイトとアルフ。

最愛「何処に行くんですか？」

フェイト「何処って…部屋に帰るんだけど…」

予想外の言葉に軽く動揺しながらも答えるフェイト。

最愛「この部屋で暮らしてたんじゃないんですか？」

アルフ「違うよ。アタシとフェイトは隣の部屋」

最愛「行っちゃうんですか？」ウルウル

「「「う…」」」

謎の罪悪感が湧き上がる三人。

当麻「でも…一緒に寝るわけには…」

アルフ「そうだよ…いくらなんでも…」

フェイト「一緒に…あう…／／／」

最愛「どうしても駄目なんですか？」

どうしたらいいか分からずうろたえる三人だったが、アルフが溜息をついて絹旗に話す。

アルフ「いや…そもそもあのベッドじゃ四人は寝れないでしょ…」

最愛「だったら隣の部屋から持ってくればいいんじゃないですか？」

どうしても譲らないつもりなのかアルフの言葉を否定する最愛。

三人はお互いの顔を見て、覚悟を決めた。

アルフ「はあ…分かったよ…」

一旦隣の部屋に帰ってベッドを持ってくるアルフ。

少女が持てる重量ではなかったのだが、アルフはベッドを簡単に運んだ。

最愛「見た目によらず超怪力なんですね！」

アルフ「『超』は余計だよ…」

少年のベッドの隣にベッドを置くアルフ。

体を洗っていないことに気付いた一同は、一旦部屋に帰って体を洗うことに決めた。

ちなみに、最愛はフェイトとアルフと一緒にだった。

身体を洗い終えた少女達は、ベッドに向かう。

最愛「それじゃあ寝ますか！」

ベッドにダイブする最愛と彼女に続いてダイブするアルフ。

そんな二人の様子を見ていた上条当麻とフェイト・テストアロッサ。

当麻「ねえ…やっぱり僕は風呂場で寝てもいいかな？」

フェイト&最愛「（超）だめ（です）！！」

フェイトと最愛に否定されて頂垂れる少年。
アルフはそんな少年を見て笑っていた。

アルフ「諦めなよトウマ」ニヤニヤ

当麻「…はぁ…」

ベッドに入る四人。

右からアルフ、フェイト、最愛、当麻となっていた。

最愛「おやすみなさい！」

アルフ「おやすみ」

当麻「おやすみなさい…」

フェイト「おやすみ…」

ぐっすり眠るアルフと最愛。
しかし、当麻とフェイトは…

当麻&フェイト「（眠れない…）」

全く眠ることが出来なかった。
翌日、最愛とアルフが目覚めます。
ベッドの上には…

アルフ「いや〜良く寝た〜」

最愛「すつきりです」

リフレッシュしたアルフと最愛と…

当麻&フェイト「良かったね…」

目の下に隈の出来た当麻とフェイトが居た。

朝食を作り終えて、全員でご飯を食べる一同。

小学校に行く少年を見送る少女達。

授業を終えて、自宅に向かう途中の少年は八神はやてに出会った。
少女と話しながら移動する少年。

当麻「それでね…」

はやて「そうなんか…」

取り留めの無い会話を交わす二人だったが、二人はATMの前に頭を抱える少女を見つける。

当麻「どうしたんだろう？」

はやて「分からんけど…何か困つとるみたいやな…」

二人は頭を抱える少女の下へ近づいていった。

神裂「どうして…こんなことに…」

必要悪の協会に所属することになった神裂火織。

彼女は土御門元春から、ＡＴＭでお金を引き落として来いと言われてカードを渡された。

しかし、極度の機械音痴である彼女にとっては、これは試練に等しかった。

ＡＴＭの使い方が分からず、最終手段を取るべきか考えていた彼女の下に少年と少女が声を掛けた。

当麻「あの…」

はやて「大丈夫ですか？」

神裂「え？」

動揺する彼女に、何があつたのかと尋ねる二人。

ＡＴＭの使い方が分からないと話す神裂。

二人にＡＴＭの使い方を説明されて、何とかお金を引き出すことが出来た。

神裂「なんとお礼を言ったらいいか…」

当麻「気にしないで下さい」

はやて「困った時はお互い様や」

神裂「ありがとうございます」

二人に一礼して、その場から立ち去ろうとする少女だったが…

グ~~~~!!

当麻&はやて「あ…」

神裂「／／／」カァ

少女のお腹の音が周囲に響き渡る。
顔を真っ赤にする少女。

神裂「も…申し訳ありませんが…この近くに定食屋はありませんか？／／／」

当麻「定食屋は無いですけど…」

はやて「ファミレスなら…」

ファミレスという言葉に聞き覚えが無い少女だったが、二人に強引に案内される。

二人は少女をファミレスの前まで連れてきた後、その場から立ち去ろうとしたが、少女に引き止められる。

何かと世話になった二人にご飯を奢ろうとする少女の申し出を断る二人だったが、そのまま強引にファミレスの中にまで連れて行かれた。

運ばれてきた料理を食べながら、色々なことを話す三人。

ご飯を奢ってくれた少女に、屈託の無い笑顔で感謝する二人。

神裂「私は…人に感謝される様な人間では…ありません…！」

一瞬で雰囲気が変わった少女に動揺しながら、その理由を聞く三人。
神裂火織は自身の幸運体質について語り始めた。

はやて「よく分かんけど…神裂さんがおみくじ引いたら大吉で、

周りの人がおみくじ引くと大凶が出るってことなんか？」

神裂「大体その様なものです」

当麻「そんなことって…」

神裂「私は『幸運』によって周りの人を『不幸』にしているんですよ…」

自嘲気味に話す少女の姿を見る上条当麻。

強すぎる『幸運』によって『不幸』になってしまった少女。

生まれつきの『不幸』によって苦しみ続けた少年。

境遇こそ違えど『不幸』に苛まれる二人。

自身が『不幸』だからこそ、他人の『不幸』を望まない少年。

そんな少年にとって、少女の苦しみは耐えがたいものだと感じた。

しかし、八神はやての反応は…

はやて「それは…間違つとるんやないか？」

当麻& a m p ;神裂「間違つてる？」

はやて「それって神裂さんが他人を不幸って決めつけとるだけじゃないんか？」

神裂「しかし…！」

はやて「『幸運』か『不幸』かを決めるのはあくまで本人や、他人が決める様なもんやあらへん」

当麻「…」

はやて「もし、神裂さんが周りの人を『不幸』にしとるって考えたら、それはただの『幻想』や」

神裂「幻想…ですか？」

はやて「せや。『幻想』は『現実』やあらへん」

当麻「幻想…」

はやて「せやから、神裂さんはあんま思い詰めんようにな」ニコ

神裂「ありがとうございます…」

食事を終えて、二人は神裂火織と分かれた。

八神はやてと別れた上条当麻は、先程の彼女の言葉を思い出していた。

当麻「（『幸運』か『不幸』かを決めていいのは自分自身…）」

例え、傍から見たら『不幸』な人間が居ても、本人は『幸運』と感じているのかも知れない。

当麻「幻想か…」

なのは「上条君？」

当麻「た…高町さん？」

なのは「そうだけど…」

ユーノ「何か言っていたみたいだけど…」

当麻「気にしないで…それより、高町さんは何をしてるの？」

帰宅途中といえばそれだけなのだが、高町なのははランドセルを背負っていなかった。

なのは「ジュエルシードを探してるんだけど…」

当麻「僕も手伝うよ」

なのは「いいの？」

当麻「うん」

当麻の申し出を受けるなのは。

嬉しそうな表情を見せる高町なのは。

ユーノ・スクライアも嬉しそうだった。

二人を巻き込んでしまったことに罪悪感を感じているが、なのはの負担を和らげることが出来ることに安堵していた。

第14話 二人の魔法少女

『私立聖祥大附属小学校』

いつも通り五人で昼食を食べていた一同。
そこで月村すずかが上条当麻に声を掛ける。

すずか「あの…上条君…」

当麻「どうしたの月村さん？」

すずか「明後日は空いてる？」

当麻「ごめん。その日はちょっと…」

すずか「う…ううん！気にしないで」

少しばかり残念がっているすずかだったが、少年にも事情があることを察する。

その日は、月村すずかの自宅にて高町なのはとアリサ・バニングス、浜面仕上が集まる予定だった。

内容は月村邸で行われる定期的なお茶会といったものだった。

少年が少女に誘われた日は、フェイトのジュエルシードの搜索に付き合つと決めてある日だった。

授業が終わっていつもの様に帰る一同。

浜面仕上は、なのは達と別れた後、自宅に向けて歩いていた。

仕上「う…ん…」

ここの所悩んでばかりいる少年。

その理由は、少し前に出会った滝壺理后という少女。一日遊んだだけなのに、少年は少女のことを一日も忘れられなかった。

仕上「学園都市かあ…」

最愛「何をボソボソ呟いているんですか？」

仕上「うおわあ！！」

最愛「ちょ…いきなり大声出さないで下さいよ！！」

仕上「いきなり話し掛けられたらビックリするに決まってんだろ！！」

最愛「何ですかその言い草は！！せつかく人が超心配してあげたのに！！」

仕上「誰も心配してくれなんて言ってねーだろ！！」

下を向いて呟いている浜面仕上を心配した絹旗最愛が声を掛けたのだが、余計な心配だったようだ。

最愛「恩を仇で返すボサボサ頭にはご飯を奢ってもらいます！！」

仕上「何でそうなるんだよ！！つかボサボサ頭って言うな！！」

最愛「どう見てもボサボサ頭じゃないですか！！」

仕上「この野郎…」

最愛「そんなことは超どうでもいいですから、とっとうちを去りますよ」

近場のファミレスに強制的に連行される浜面仕上。

少女が年下ということもあり、ここは自分が大人になるべきだと言
い聞かせる少年だったが…

最愛「え〜っと…これとこれとこれ…お願いします」

仕上「ちょっと頼みすぎじゃねえか？」

最愛「そんなことはありません」

仕上「今月の小遣いが…」

財布の中を見て頂垂れる少年。

凄まじい速度で頼んだ料理を食べる絹旗最愛。
その食べっぷりを見た少年は…

仕上「太るぞ？」

最愛「ッ！…ごほ…」

少年の言葉でむせる少女。

仕上「お…おい…大丈夫か？」

最愛「乙女に何てこと言っんですかー!!」

バキ！！

仕上「へぶあ！！」

少女の拳が少年の顔面に直撃する。

仕上「いてえ…」

涙目になっている少年と料理を食べ進める少女。

最愛「ご馳走様でした！！」

仕上「…はあ…」

最愛「どうしたんですか？溜息なんかついて…」

仕上「誰のせいだと思ってんだよ…」

最愛「小さいことを気にしてはいけませんよ。ボサボサ頭」

仕上「だから俺はボサボサ頭じゃねえって…浜面仕上だよ」

最愛「浜面ですか…私は絹旗最愛です」

仕上「そっか」

最愛「そっけない反応ですね。超美少女である私の名前を知れただけでも幸せでしょう？」

仕上「自分で美少女って言うなよ…」

ファミレスを出る二人。

最愛「ご飯を奢ってもらってありがとうございます」

仕上「殆どカツアゲだったじゃねえか…」

最愛「さよなら」

手を振って仕上に挨拶する最愛。

少女の姿が見えなくなって、財布の中を確認する少年。
案の定、財布の中は空っぽになっていた。

仕上「…チクショウ…」

『月村邸』

翌日、浜面仕上と高町なのは、アリサ・バニングスが月村邸を訪れていた。

ちなみに、なのはの兄である高町恭也も付き添いで来ていた。

仕上「相変わらずでけえな…」

なのは「そうだね…」

アリサ「そうかしら？」

浜面仕上も何回か月村邸を訪れたことがあるのだが、それでもこの大きさには慣れていなかった。
紅茶を飲んで雑談する一同。

少女達が雑談している頃、浜面仕上とユーノ・スクライアは…

バリバリバリ！！

仕上「ぎゃあああ！！」

ユーノ「キューー！！」

仕上は猫に顔面を引っ搔かれていて、ユーノは猫に追い掛け回されていた。

アリス「浜面は猫に嫌われてるのかしらねえ…」

すずか「は…浜面君…大丈夫？」

仕上「これが大丈夫に見えますかあ！？」

なのは「にゃはは…」

仕上「笑ってないで助けてくれえ！」

ユーノ「（…なのは…なのは…僕も助け…）」

なのは「（ユーノ君！？）」

高町なのはに念話で助けを求めるユーノ・スクライア。

すずかの飼った猫に襲われる仕上とユーノを助け出した少女達。

普段から非常に大人しく、人を襲うような事などしないはずの猫が少年を襲う理由は不明だった。

仕上「上条も来ればよかったんだけどな…」

なのは「仕方ないよ…」

すずか「上条君は一人暮らしだし…」

アリサ「だけどさあ…」

仕上「そうだ！今度俺達で上条の家に遊びに行こうぜ！」

アリサ「上条の家に？」

すずか「で…でも…上条君に聞かなくてもいいのかな？」

仕上「いいんじゃないの？あいつも色々大変そうだから、俺達で何か手伝ってやろうぜ」

なのは「上条君を手伝う…」

アリサ「いいわねそれ！浜面のくせに良い事言っじゃない」

仕上「うるせえ…」

なのは「（上条君…喜んでくれるかな？）」

ピクッ！！

ユーノ「（なのは…！）」

なのは「（これって…）」

ユーノ「（ジュエルシードの反応がある！それも近くに！）」

ジュエルシードの反応を察知したなのはとユーノ。
突然その場から逃げ出したユーノ。

なのは「あ、ユーノ君！」

アリサ「なのは！私達も！」

なのは「大丈夫！すぐ連れ戻して来るから！」

そんな少女を、浜面仕上とアリサ・バニングス、月村すずかは心配
そうに見守るのだった。

一方その頃、上条当麻とフェイト・テストアロッサとアルフはジュエ
ルシードの反応を察知して、月村邸の庭の中と思われる森に来てい
た。

この屋敷が上条当麻のクラスメートである月村すずかの自宅である
ことは、少年が知る良しもない。

当麻「広いね……」

アルフ「確かに……」

フェイト「ここにジュエルシードが……」

森の中に侵入する三人。

森の中を歩き始めて、少し経ってからフェイトは何か気付く。

フェイト「結界が張られてる…」

当麻「結界？」

アルフ「結界っていうのは…」

結界についての簡単な説明を少年にするアルフ。

ズシン！！

当麻「な…何！？」

フェイト「何か来る！」

アルフ「くっ…」

すぐさま臨戦態勢を取る三人。

警戒する三人の前に現われたのは…

ニヤ〜！

「「「はあ？」「」「」

巨大化した猫だった。

当麻「これって…」

フェイト「やっぱり…」

アルフ「猫…だよな…」

明らかに普通ではない大きさの猫。

当麻「これも…ジュエルシードの影響なの？」

フェイト「多分…」

アルフ「何か力が抜けちゃったよ…」

呆然としていた三人の下に、巨大化した猫が近づく。

巨大化した事に気付いていないのか、呑気な声を上げながら少年の下に近づいて…

ベロン！

少年の顔を舐めた。

巨大化している為、舌の大きさも普通の猫とは比べ物にならないのだが…

フェイト「この子…当麻に懐いている？」

当麻「あれ？この子って…」

少年は巨大化している猫の姿を注意深く見る。

当麻「あの時の…」

アルフ「知っているのかいとうま？」

当麻「うん」

少年の顔を舐めた猫は以前、月村すずかが探していた猫であり、少年が海鳴市に来て初めて出会った猫だった。

当麻「僕の右手でどうにか出来ないかな？」

フェイト「それは分からないけど…」

アルフ「やってみる価値はあるんじゃない？」

少年は猫の身体に右手を近づけていたが、その動きは途中で中断されることになる。

フェイト「ッ！！」

即座に後方に向けて『バルディッシュ』を構えるフェイト。

フェイトに続き、臨戦態勢を取るアルフ。

少年も二人に続いて後ろを見る。

そこには…

なのは「…上…条君…？」

当麻「高…町…さん？」

高町なのはが居た。

予想外の人物に出会ったことに動揺する二人。

フェイト「同型の魔導師…ロストログアの探索者…」

少女の言葉を聞いたユーノ・スクライアは…

ユーノ「（彼女は…）」

目の前の金髪の少女は自分と同じ世界からやって来た人物で、ジュエルシードの正体に気付いているということに気付く。

フェイト「ロストロギア…ジュエルシード」

『Scythe Form Set up』

そう呟いたフェイトは専用のデバイスである『バルディッシュ』を戦斧から鎌の形状に変化させる。

フェイト「悪いけど…頂いていきます…」

一気に高町なのはに近づき、斬りかかるフェイト・テストロッサ。この場の上条当麻が居るという事に動揺しているのはだったが…

『Evasion, Flier Finn』

少女の足にピンク色の羽根みたいなものが生えて、フェイトに斬りつけられる前に空中へ移動した。

二人の戦いを眺める事しか出来ない上条当麻とアルフ、ユーノ・スクライアの三人。

ユーノ「どうして!?!」

当麻に向かって叫ぶユーノ。

上条当麻にはジュエルシードの危険性について全て話した。その上で、彼は自分に協力してくれると言った。

少年はジュエルシードの暴走によって巻き込まれた少年と少女を助ける為に全力で戦った。

そんな上条当麻がどうしてもして他の魔導師と一緒に居るのかユーノにはどうしても分からなかった。

その頃、高町なのはとフェイト・テスタロッサは未だに戦い続けていた。

徐々に追い込まれていく高町なのは。

なのは「どうして…こんな…」

フェイト「答えても多分…意味はない」

お互いに距離を取る二人。

『Device Mode』

鎌から斧の形状に変化した『バルディッシュ』

『Shooting Mode』

射撃に特化した形に変化した『レイジングハート』

『Divine Buster Stand By』

『Photon Lancer Get Set』

お互いを攻撃するための準備が終了する二人
そんな中でも、なのはの心を支配していたのは先程の出来事だった。

なのは「（どうして上条君が…それにこの子は一体…）」

突然の事態に混乱する精神を無理やり落ち着かせる。

お互いの必殺の一撃が放たれようとした瞬間…

ニヤ〜！！

巨大化した猫の声がその場に響き渡った。

それこそが、高町なのはにとって命取りとなった。

フェイト「…ごめんね…」

『Fire』

『バルディッシュ』から放たれる金色の光線。

『Protection』

金色の光線が直撃する前に『Protection』を発動するなのはだったが、全てを防ぎ切れず、少女の身体は宙を舞った。

ユーノ「な、なのは！！」

意識を失い墜落するなのは。

このまま地面に激突するかわかれたが…

当麻「おおおおお！！」

高町なのはの落下地点まで駆け出した上条当麻。
なのはを受け止める事に成功する当麻。

所々傷を負っている少女の姿を見て、心を痛める少年。
少年の下に降りてきたフェイト。

フェイト「当麻…」

当麻「ごめんフェイト…ちょっと待って…」

そう言って少年は絆創膏を取り出し、怪我をしている箇所についた。

当麻「ごめんね…」

高町なのはを木の根元まで運んだ上条当麻は、巨大化した猫の下まで近づき右手で触る。

バキン！！

猫の身体からジュエルシードが出現する。

『Captured』

ジュエルシードを封印するフェイト。

その場から立ち去る三人。

去り際にもう一度なのはとユーノの方を向いた少年は…

当麻「…ごめんなさい…」

その少年の姿を見たユーノは…

ユーノ「一体何が起きているんだ…」

ただ呆然としていた。

第15話 それぞれの戦う理由

『月村邸』

フェイト・テストロッサと高町なのはの戦いから少し経って、少女は心配して探しに来た一同に発見された。

アリサ「なのはは!!」

仕上「高町!!」

すずか「大丈夫!？」

なのは「…う…」

忍「ノエル!!ファリン!!」

「はい!!」

月村すずかの姉である月村忍が、月村家の専属メイドであるノエルとファリンに声を掛ける。

高町なのはを月村邸に運ぶ二人。

恭也「くそ!!」

高町なのはの兄である高町恭也は、自分の妹が怪我をしていることに気付けなかった自分を責めていた。

なのは「う…ん…」

アリサ「なのは!」

すずか「なのはちゃん!」

仕上「気がついたか?」

なのは「あれ…私…」

アリサ「庭の森の中で倒れていたのよ」

なのは「そう…（やっぱり…あれは…夢じゃない…）」

自分と同じ魔法の力を使う金髪の少女とクラスメートである上条当麻と出会ったことを思い出す少女。

仕上「一体何があつたんだ?」

なのは「え…つと…」

先程の出来事を正直に話すわけにはいかない少女。

恭也「なのははまだ起きたばかりだから休ませてやってくれ」

仕上「それもそっか…」

目覚めたばかりの少女に、質問攻めにするのは良くないと判断した恭也が一同に告げる。

忍「ごめんなさい」

なのはに謝罪の言葉を述べる月村忍。

恭也「忍は悪くない」

彼の言う通り、敷地内で事件に巻き込まれるなど予想が出来る筈もない。

なのは「そうですよ。勝手に抜け出した私の責任ですから…」

申し訳なさそうな顔でなのは、一同に勝手に抜け出したことを謝った。

仕上「とにかく。大したことなさそうでしたぜ…」

それから少し後、早めに帰宅した一同。

なのはは恭也におぶられて、自宅に帰った。

『高町家』

恭也から何があったのか説明を受けた家族はなのはを心配したが、少女は心配ないと話してその場を乗り切った。

自分の部屋に移動した高町なのはとユーノ・スクライア。

ユーノ「なのは…大丈夫かい？」

なのは「うん…思ったより怪我はしてなかったから…」

ユーノ「良かった…」

なのは「でも…高いところから落ちたのに…」

金髪の少女の一撃を受けて、気絶した少女は地面に墜落した筈だ。それなのに、それほど身体は痛くない。

ユーノ「当麻君がなのはを受け止めたから…」

なのは「上条君が？」

ユーノ「うん…なのはが怪我した頬に絆創膏を貼っていたし…」

そう言われた少女は、自分の頬を触る。

なのは「そうだったんだ…」

ユーノ「ジュエルシードを回収した後に、ごめんなさいって言うてたんだ…」

なのは「…」

上条当麻の一連の行動をユーノから聞いた少女は…

なのは「上条君…一体何が…」

ユーノ「それは分からないけど…」

少年の真意が分からない以上、これ以上考えても無駄であると結論を出す二人。

なのは「あの女の子は…」

ユーノ「恐らく…あの子は僕が居た世界の人間だ…」

なのは「ユーノ君と同じ世界？」

ユーノ「うん…だからジュエルシードの危険性は知っている筈なんだけど…」

金髪の少女がジュエルシードを集める目的など、全く見当の付かない二人。

なのは「（あの子…最後に…謝っていた…）」

なのはが思い起こすのは、金髪の少女が一撃を放つ前に告げた一言。あの少女が情け容赦の無い人間だったなら、高町なのははこの程度の怪我では済んでいない。

なのは「（それに…）」

上条当麻が金髪の少女と一緒に行動していた理由も分からない。短い間ながら、上条当麻の性質を理解していた少女。

誰よりも他人の不幸を望まず、不幸に巻き込まれている人間がいるならば、全力で助けようとする少年。

そんな彼が、ジュエルシードの悪用を考えている人間と一緒に行動する筈がない。

幸い明日は小学校がある為、少女の目的について少年に尋ねる事が出来る。

上条当麻が学校に来るかどうかは別として…

色々な問題が起きているが、ベッドに入って眠りにつく高町なのはだった。

『マンション』

フェイト「…そう…だったんだ…」

アルフ「トウマのクラスメート…ねえ…」

当麻「うん…」

上条当麻の部屋で今日の出来事について話していた三人。
絹旗最愛は深い眠りにについていた。

今日戦った魔導師は当麻のクラスメートであることを聞いたフェイト。

そのことを聞いた少女は少しばかり動揺していたが…

フェイト「それでも…私は…ジュエルシードを集めなくちゃいけない…」

アルフ「分かってるよフェイト」

当麻「…うん…」

フェイト・テストロッサがジュエルシードを集める目的を知っている少年は、彼女の決意を否定出来なかった。

しかし、高町なのはとフェイト・テストロッサが傷付け合うことを望まない少年にとって、現在の状況は非常に好ましくなかった。
部屋に戻るフェイトとアルフ。

少年も明日に向けてベッドに入る。

具体的な解決策も見つからないまま、上条当麻は眠りについた。

『???』

大量の死体が転がっている中央に小学校低学年位の少女が立っていた。

彼女の身体には夥しい量の血液が付着しており、彼女の周囲に転がっている死体には、鉄の棒の様な物体が突き刺さっている物や綺麗に切断された物が散乱としていた。

幼い頃から『実験』と称して、人間を殺すことを強要されてきた少女。

その少女にとって、人を殺すという行為は何も珍しいというわけではない。

ある日、少女はとある少年の『実験』を見学させられていた。

白髪の少年に向かって、容赦なく発射される銃弾。

しかし、銃弾は少年の身体ではなく、銃弾を放った男達の身体を貫いていた。

白髪の少年と目が合った少女。

お互いに興味など全く無かったらしく直ぐに目を逸らした。

次の日、白髪の少年の『実験』が再び行われるということで見学することになった少女。

『実験』の内容は昨日のように男達が少年に向けて、銃弾を放つというものではなく…

『実験』の会場にあった物は、大量の戦車や戦闘機など、一人の人間に対してあまりにも過剰すぎる戦力だった。

少年に向けて行われる一斉射撃。

肉片すら残りそうに無い破壊の暴風が吹き荒れる。

しかし、攻撃が止んだ場所には無傷の少年が何事も無かったかの様に立っていた。

圧倒的な力を奮う少年。

その姿は正しく『化け物』と呼ぶに相応しかった。

少年の『実験』が終了して数日後、少女が居る研究所に一人の少女

が入って来た。

どうやらその少女は『置き去り』らしく、自分の様に『闇』に浸かっているわけではなかった。

積極的に話しかけてくる少女に、今まで出会ったタイプの人間ではないと実感する少女。

その少女は、命は何よりも大切だと常々少女に語った。

あまりにも多くの生命を奪ってきた少女に、その言葉は酷く滑稽に思えた。

最初は鬱陶しいだけだと考えていた少女だったが、いつの間にかその少女と一緒に居る時間に温もりを感じていた。

今まで生きてきた中で感じたことも無い様な感情。

その感情の正体が分からない少女だったが、その時間が何時までも続いて欲しいと思っていた。

しかし…

ある日、温もりを覚えてくれた少女が『実験』に参加するという話を聞いた。

急いで『実験』の会場に向かう少女。

そこで彼女が見たものは…

血塗れになって倒れている少女だった…

???「…ちゃん…私…死にたく…もっと…ちゃんと…一緒に…」

口から流れ続ける血で、必死に話す少女。

そして…

少女は動かなくなった…

????「ッ!」

海鳴のマンションで少女は目を覚ます。

????「また…あの夢…か…」

少女は自分でも気付かない内に、目から大粒の涙を流していた。

『私立聖祥大附属小学校』

授業が終了していつも通り帰ろうとする一同。
しかし、今日はいつもと異なっている点があった。

アリサ「なのはー帰るわよー!」

なのは「ごめんアリサちゃん。今日はちょっと…」

アリサ「分かったわよ」

そう言つて浜面仕上と月村すずか、アリサ・バニングスは教室を出て行った。

上条当麻も彼等が続くように帰ろうとしたが…

なのは「上条君…ちょっといいかな…?」

当麻「…うん」

少年も少女が言いたい事を理解していたのかその言葉を聞いて軽く

頷く。

屋上に向かう高町なのはと上条当麻。
屋上に到着した二人。

当麻「怪我は大丈夫？」

なのは「うん…上条君が助けてくれたんだよね？」

当麻「…」

なのはの問いに当麻は答えない。

ユーノ「どうして君はあの子と一緒にいたんだい？」

当麻「それは…」

言葉に詰まる少年。

なのは「上条君はあの子がジュエルシードを集める目的を知っているの？」

当麻「…うん…」

ユーノ「それは…？」

当麻「ごめん…言えない…」

なのは「…上条君…」

少年の言葉を聞いた少女はそれ以上何も言えなくなる。

上条当麻は屋上の入り口まで戻って…

当麻「ごめん…高町さん…ユーノ君…」

少年はそのまま二人の前から立ち去って行った。

第16話 海鳴温泉

『私立聖祥大附属小学校』

高町なのはとフェイト・テストロッサとの出会いから数日後、昼休憩の小学校にて…

当麻「温泉？」

仕上「ああ、毎年この時期に高町の親が連れてってくれるんだよ」

当麻「そうなの？」

アリサ「そうよ」

すずか「海鳴市の名物の一つとして温泉があるから」

当麻「なるほど」

仕上「だからさ～お前も来ないか？」

当麻「ごめん。その日も用事が…」

仕上「またそれかよ～」

すずか「上条君だって用事があるから…」

なのは「…」

上条当麻の用事とはジュエルシードの搜索なのだろうと推測する高町なのは。

当麻「本当にごめんね…」

アリサ「何か困ったことがあるなら相談しなさいよ？友達なんだから」

当麻「ありがとう…皆…」

自分の事を気に掛けてくれるメンバーに感謝すると同時に、ジュエルシードの被害から守ってみせると堅く誓う上条当麻。

仕上「この前も用事があつたらしいけど、お前の用事って何なんだよ？」

当麻「それはちょっと…」

すずか「言えない事もあるんじゃないかな？」

仕上「そういうもんか？」

アリサ「そういうものよ」

高町なのは達が温泉に向かうと話した日に、上条当麻も海鳴市の温泉に用事があった。

しかし、彼は温泉に行つてリフレッシュすることが目的ではない。授業が終了して帰路につく一同。

本日は、高町なのはとアリサ・バニングスと月村すずかの三人は塾があるらしく、そのまま別れた。

浜面仕上も今日は家庭の用事があるらしく、そのまま別れて上条当麻は一人マンションに向けて帰ろうとしたが…

当麻「（久しぶりに図書館にでも行こうかな…）」

海鳴市に来てから殆ど時間の取れなかった少年は、久々に図書館に向かった。

八神はやての言葉通り、図書館には彼女が居た。

当麻に気付いたはやては無言で手を振る。

少女が座っている場所まで移動する少年。

はやて「図書館で会うのは久しぶりやね」

当麻「このところ色々忙しかったからね」

はやて「まあ…上条君は海鳴に来たばかりやからな」

少年が多忙な原因は、ジュエルシード絡みであるのだが…

少年も借りてきた本を読み進める。

そこで、八神はやてが…

はやて「上条君…いきなりやけど…明後日は空いとる？」

当麻「どうしたの？」

はやて「いや…その…上条君はまだうちの料理…食ってないやろ？」

フェイトとアルフには手料理をご馳走したはやてだったが、少年は少女の料理を食べたことが無い。

当麻「その日は…ごめん…用事があるんだ…」

はやて「そっか…なら仕方ないね…」

少しばかり寂しそうな表情を見せる八神はやて。

そんな彼女の表情を見逃さなかった上条当麻は…

当麻「八神さんは…明後日は空いてる？」

はやて「え…？う…うん…」

当麻「明後日は用事があるって言ってたけど、友達と温泉に行くんだ。その…八神さんも来ない？」

はやて「…温泉？」

突然の申し出に動揺する少女。

はやて「で…でも…」

当麻「大丈夫だよ。一緒に行くのはフェイトとアルフと…一緒に暮らしている友達が一人だから…」

ピク…!!

一緒に暮らしている友達という言葉に反応する八神はやて。

はやて「一緒に暮らしてる友達って…女の子か？」

少しばかり黒いオーラを放つ少女。

当麻「そうだけど…優しい子だから直ぐに仲良くなれるよ」

はやて「…全く…」

当麻「どうしたの？」

はやて「何でもないで…」

当麻「八神さんも一緒に来ない？」

はやて「…うん」

少女の了承を得た少年は一旦図書館から出て携帯電話を使い、フェイト・テストロッサに連絡を取る。

通話を終えて、再び八神はやてが居る場所に戻る上条当麻。

当麻「それじゃあ明後日に迎えに行くから」

はやて「うん」

八神はやてと別れた上条当麻はマンションに帰って行った。

翌日、海鳴市の温泉に向かうメンバーは、高町家一同と月村家＋メイド一同、浜面仕上、アリサ・バニングスとなっていた。

テンションの上がつている仕上と彼を落ち着かせるアリサとすずか。高町なのはユーノ・スクライアと念話をしていた。

なのは「（あの子は何でジュエルシードを集めているんだろう？）」

ユーノ「（それは分からないけど…当麻君の態度を見る限り…僕達の目的とは確実に違っただろうね…）」

なのは「（…うん…）」

もし、あの金髪の女の子がユーノと同じ目的を持って行動しているのならば、敵対する理由が無い。

相手がこちらがジュエルシードを悪用すると考えても、上条当麻が誤解を解く筈だからだ。

なのは「（上条君があの子のジュエルシードの搜索に協力する理由…）」

ユーノ「（こればかりは本人が話してくれるのを待つしかないだろうね…）」

高町なのはとユーノ・スクライアがそのことについて深く考え込んでいる内に、温泉に到着した面々。

早速、温泉を堪能するために行動する一同。

大浴場に向かった浜面仕上と高町士郎と高町恭也。

温泉を堪能する男性陣。

仕上は高町士郎の身体を見て…

仕上「相変わらずおっちゃんの身体はすごいな」

士郎「…おっちゃんって…」

軽くショックを受ける高町士郎。

浜面仕上が声を上げたのは、筋肉隆々とした肉体ではなく、その身

体に刻まれた多くの傷を見たからだった。

翠屋のマスターをする以前の高町四郎は、ボディガードとして世界中を飛び回っており、多くの傷を負っていたからだ。
大浴場で動き回る少年を見て呆れた高町恭也。

恭也「そんなに動き回るとこけるぞ」

警告する恭也の言葉を聞いた仕上は、彼の方を向いて…

仕上「そっぴや月村のねーちゃんとはどうなったんだ？」

恭也「！？…ごぼっ…」

予想外の質問にむせる高町恭也。

仕上「付き合ってたんだろ？」

恭也「何をいきなり…」

仕上「あれで付き合ってたわけねーだ「根性おお！」…」

「「「何だ！？」「」」

突如、大浴場に響き渡った大声に呆然とする男性陣だった。
男性陣が温泉を出てから、女性陣が後に続いた。

アリサ「ユーノも一緒に入ろうね」

ユーノ「キューー！！」

全力でその場から逃げ出そうとするユーノだったが、この場に居る全員から逃げ切ることなど不可能。

ユーノ「（助けてなのは）」

なのは「（大丈夫だよユーノ君）」

ユーノ「（大丈夫じゃないよー！）」

そのまま女性陣に連れられて行かれそうになっていたユーノ・スクライアだったが…

『根性だあああ！！』

突如聞こえてきた絶叫に気を取られた女性陣の隙についてその場から逃げ出すユーノ。

すずか「あ！ユーノ君が！」

なのは「ユーノ君！」

アリサ「何なのよ一体…」

突然の出来事に呆然としていた女性陣だった。

それから一時間経ち、フェイト・テストロッサ御一行も温泉に到着した。

高町なのは達がリラックスで訪れた温泉と、ジュエルシードを封印するために訪れた温泉が同じ場所であるなど少年が気付く筈もなかった。

初めての温泉に胸を躍らせる一同。
参加メンバーは、上条当麻にフェイト・テスタロッサ、八神はやてと絹旗最愛、アルフとなっていた。
この中で温泉に入ったことがあるのは、八神はやてだけだった。
温泉に到着した一同は、まず割り当てられている部屋に向かった。
彼女達が泊まる部屋は一室だけで、四人の女の子に囲まれて寝ることが決定している上条当麻だった。
部屋に到着した一同。
先に風呂に入ってくればいいとフェイト達に促される上条当麻。
その言葉に甘えて温泉に入る少年。

当麻「…ふう…」

生まれて初めての温泉を堪能する少年。

ボコボコ！

当麻「ん？」

少し離れた場所で、泡が発生している場所を見つける少年。
その正体が気になった当麻は徐々に近付いていく。

ドパアアン！！

当麻「うわあああ！！」

泡があつた場所から黒髪の少年が勢い良く出てくる。

???「よし…これで三十分だ…」

当麻「あ…あ…」

腰の抜けた上条当麻を見た少年は…

???「何だお前？立てないのか？根性の無い奴だな…」

と呟いていた。

少し時間が経って落ち着きを取り戻した上条当麻。

当麻「君は？」

軍覇「俺の名前は削板軍覇だ！！」

力強く名乗る少年。

当麻「僕は上条当麻」

軍覇「上条か…中々根性ある髪型してるじゃねえか！」

ツンツン頭を褒められてどう対応すればいいのか全く分からない少年。

軍覇「それじゃあな！！」

凄まじい速度でその場から去って行った削板軍覇。
残された上条当麻は空いた口が塞がらなかった。

上条当麻が部屋に戻り、温泉に向かうフェイト達。
部屋に戻った時の少年の様子が少しばかりおかしかったが、特に気にしないことにした。

早速、温泉に入るフェイト達。

八神はやては足が不自由というハンデがあるのだが、その問題は三人がカバーすることによりクリアすることが出来た。
初めての温泉を堪能する少女達。

最愛「超極楽です……」

アルフ「サイコーだね……」

フェイト「気持ちいい……」

はやて「懐かしいな……」

何かと忙しいフェイトやアルフにとって、この時間は至福の時となっていた。

第17話 セカンド・エンカウント

浴衣に着替えて旅館内を歩き回っていた高町なのはとアリサ・バニングス、月村すずかと浜面仕上。

旅館の中を見回っていた途中で、すずかがなのはに声を掛ける。

すずか「なのはちゃん。大丈夫？」

なのは「え？」

すずか「ここ最近、何だか疲れてるようだったから…」

なのは「大丈夫だよ」

アリサ「上条にも言ったけど、何か困ったことがあるなら相談しなさいよ。友達なんだから…」

仕上「あんまり無理すんなよ？」

なのは「皆…ありがとう…」

少女の悩みの原因を話すわけにはいかないが、自分を心配してくれる人々の言葉を聞いて、少しばかり気が楽になる高町なのはだった。

ユーノ「（なのは…せっかくの休みなんだから…ちゃんと休みなよ）」

なのは「（ありがとうユーノ君）」

なのはの肩に乗っているユーノが、念話でなのはに話しかける。今回は、ジュエルシードの搜索を忘れてリフレッシュすることを促すユーノに感謝するなのは。

再び、旅館内の探索をする一同。

そこで彼女達は、額に赤い宝石の様な物を付けた女性に出会う。

アルフ「はあ、い♪おちびちゃん達♪」

┌
┌
┌
┌
:
?
┌
┌
┌
┌

突然話しかけられて動揺する一同。

高町なのはとユーノ・スクライアは目の前の女性に見覚えがあった。

なのは「（ユーノ君…あの人…）」

「（金髪の女の子や当麻君と一緒にいたんだ…）」

月村邸でフェイト・テストロッサと対峙した際に、上条当麻と一緒にいた女性。

やたらとテンションの高い女性を見た少女達は、酔っ払いなのではないかと判断した。

浴衣姿の女性は、そのまま高町なのはに近付いて……

アルフ「君かね？
うちの子達をアレしてくれちゃってるのは？」

うちの子達とは、金髪の少女と上条当麻であると推測する二人。

高町なのはの姿をジロジロ見た女性は……

アルフ「あんま賢そうでも強そうでもないし……ただのガキンチョに

見えるんだけどなあ…」

なのは「あ…あの…」

うろたえるなのはの前にアリサが立ち塞がる。

アリサ「…なのは、お知り合い？」

なのは「え…ええっと…」

厳密に言えば、初対面ではないのだが、こうして面と向かって話すのは初めてな少女。

口籠る高町なのはの様子を見たアリサ・バニングスは…

アリサ「この子、貴女を知らないそうですが？どちらさまですか？」

毅然とした態度でアルフに話しかけるアリサ。

友達想いの少女だからこそ、ここまで初対面の人間に対して言う事が出来たのだろう。

静まり返る廊下。

高町なのはの顔を見つめるアルフ。

アルフ「あははは！！」

突然笑い始めた女性にどう反応すればいいのか分からず呆然とする一同。

アルフ「いやゝごめんごめん。人違いだったかな」

アリサ「人違い？」

アルフ「あたしが知っている子に淒く似てたもんだからさ」

なのは「なんだ…そうだったんですか…」

アリサ「む」

アルフ「可愛いフェレットだね」

高町なのはに近付いてユーノの頭を撫でるアルフ。

相変わらずアルフを警戒するアリサと安堵する高町なのは。

アルフ「……今のところは、挨拶だけだね…」

「「!?!」」

突如、頭の中に響いてきた声に動揺するのはとユーノ。

なのは「（これって…）」

アルフ「（忠告しておくよ。子供はいい子にして、おうちで遊んでいなさいよね…）」

ユーノ「（君は…）」

アルフ「（おいたが過ぎるとガブツといくわよ?）」

なのは「（貴女は…）」

アルフ「（トウマのクラスメートだからって手加減しないからね）」

ピクー！！

トウマという言葉に反応する高町なのはとユーノ・スクライア。

なのは「さあゝて、もうひとつ風呂行つてこよゝと」

意気揚々とその場から立ち去るアルフ。

すずか「な…なのはちゃん…」

なのは「あ…う…うん…」

アリサ「なあにあれ！？」

なのは「か…変わった人だったね」

アリサ「真昼間から酔っ払ってんじゃないの！？」

すずか「ア…アリサちゃん…」

アリサ「だからって節度つてモンがあるでしょ！？」

なのは「まあまあ…ここは寛ぎ空間だし色んな人が居るよ」

先程から怒りを露にしているアリサ・バニングスを落ち着かせている高町なのはと月村すずか。

二人がアリサを落ち着かせている頃、浜面仕上は…

仕上「…胸でけえ…」

アルフの胸の大きさを思い出していた。

それから少し時間が経って、上条当麻とフェイト・テストロッサとアルフは旅館から少し離れた森の中に居た。
結界を張るフェイト。

彼等が何故このような場所に居るのかというと、上条当麻の特訓を行う為である。

フェイト「始めるよ!!」

当麻「うん!!」

『バルディッシュ』を構えるフェイト・テストロッサ。

彼女はバリアジャケットに着替えており、戦闘準備は万端だった。

『Device Form』

フェイト「バルディッシュ…フォトンランサー…連撃」

『Photon Lancer Full Auto Fire』

ドドド!!

大量の魔力弾が少年に襲い掛かる。

当麻「くっ…!!」

バキン!!

少年はそれを右手で殴り打ち消していく。
消し切れない攻撃は、ギリギリで避ける。

『Scythe Form』

戦斧から鎌の形状に変化する『バルディッシュ』

フェイト「ハアッ!!」

当麻「ここか!？」

ビュン!!

近接戦闘を仕掛けるフェイト。

上条当麻はフェイトの攻撃をギリギリで避ける。

特訓を始めた当初は、フェイトの攻撃に全く対応することが出来なかったが、非常に厳しい特訓を何度も繰り返したことにより、少年はフェイトの攻撃にある程度対応することが出来るようになっていた。

アルフ「頑張れ!!」

そんな二人の戦いを眺めるアルフ。

アルフは上条当麻の近接戦闘の特訓を受け持っている。

フェイトのデバイスとは異なり、拳で戦うのが主な彼女は当麻にとって師匠と呼べる存在だった。

防戦一方だった上条当麻もフェイトに向かって攻撃する。

上条当麻は空を飛ぶことが出来ないこともあり、ハンデとして地上で戦っているフェイト・テストロッサ。

上条当麻の右拳による攻撃を避けるフェイト。

少年の右手には魔法を打ち消す力が宿っており、魔導師によって天敵とも言える能力と言える。

それ故に、フェイトも訓練だから言って油断は出来ないのだ。

一旦上条当麻から距離を取るフェイト・テストロッサ。

『Device Form』

戦斧形態に戻る『バルディッシュ』

フェイト「行くよ！！当麻！！」

『Thunder Smasher』

バルディッシュから放たれる金色の雷。

その雷は上条当麻に向かって真っ直ぐ伸びて…

当麻「おおおおおお！！」

右手で真正面から受け止める上条当麻。

莫大なエネルギーの為、直ぐに消えない攻撃だったが…

バキン！！

何とか打ち消すことに成功する。

当麻「はぁ…はぁ…」

フェイト「…ふう…お疲れ様…当麻…」

当麻「ありがとう…フェイト…」

アルフ「そんじゃあ、旅館に戻るうか！」

特訓が終了して旅館に戻る三人。

上条当麻の特訓から数時間が過ぎた。

アリサ・バニングスと月村すずかが寝静まった一室で、高町なのはとユーノ・スクライアは念話を用いて、会話をしていた。

なのは「（ユーノ君…昼間の人はやっぱり…上条君とあの子の関係者なのかな？）」「

ユーノ「（多分ね…）」

なのは「（このままジュエルシードを集めていたら…また…あの子と戦うことになるのかな？）」「

ユーノ「（多分…）」

なのは「（…）」

ユーノ「（なのは。僕はあれから色々考えたんだけど…やっぱり僕が一人『ストップ』…）」

なのは「（そこから先言ったら怒るよ？）」「

ユーノ「（…）」

なのは「（ジュエルシード集め。最初はユーノ君の手伝いだっただけど…今はもう違う）」「

ユーノ「（…）」

なのは「（私が…自分でやりたいと思ってやってることだから）」

ユーノ「（…）」

なのは「（一人で無茶したら怒るよ?）」

ユーノ「（…うん）」

それから更に時間が経過した夜中…

なのは「（ユーノ君!）」

ユーノ「（近くにジュエルシードがある!）」

ジュエルシードの反応を察知した二人が、反応を察知した場所まで急ぐ。

その頃、上条当麻とフェイト・テストアロッサとアルフが、橋の上から湖の様子を覗いていた。

ジュエルシードを封印する為の準備が完了している三人。

アルフ「凄いなこりゃ。これがロストロギアのパワーって奴?」

アルフが楽しそうに語る。

フェイト「随分と不完全で不安定な状態だけどね」

当麻「暴走はしてないみたいだね…」

今までジュエルシードの暴走によって、発生した怪物と戦っていた少年が初めて見る光景だった。

アルフ「フェイトの母親は、どうしてあんなものを欲しがってんだろうね…？」

それはアルフだけではなく、上条当麻も疑問に感じていた。

フェイト「分からないけど…理由は関係ないよ。母さんが欲しがってるんだから、手に入れないと……！」

当麻「…」

フェイト「バルディッシュ、起きて！」

『Yes, sir』

『Sealing Form・Set up』

フェイト「封印するよ。二人ともサポートお願い！」

アルフ「ああ！」

当麻「うん！」

ジュエルシードを封印することに成功するフェイト。
ジュエルシードを封印し終えた彼女達が出会ったのは…

なのは「上条君…」

当麻「高町さん…」

アルフ「……あゝら、あらあら……」

高町なのはとユーノ・スクライアだった。

月村邸の時と同じく、予想外の場面で出会い軽く動揺する上条当麻。高町なのはは昼間にアルフに出会っていたことから、少年に出会う可能性を考慮していた。

アルフ「子供はいい子でって言わなかったっけ？」

ユーノ「それを…ジュエルシードをどうするつもりだ！？ それは危険な物なんだ！」

アルフ「さあね…答える理由が見当たらないよ？それにさあ…アタシ親切に言っただけだよ？いい子でなきゃガブツと行くよって…」

狼を連想させる姿に変身するアルフ。

その姿を始めてみた少年は…

当麻「…犬？」

アルフ「アタシは狼だ!!」

当麻「…ごめん…」

ユーノ「やっぱり……アイツ、あの子の使い魔だ！」

アルフの姿を見て何かを確信したユーノが話す。

なのは「使い魔……？」

アルフ「そうよ。アタシはこの子に作られた魔法生命。製作者の魔力で生きる代わり、命と力のすべてを賭けて護ってあげるんだ」

当麻「…」

アルフはフェイトの方を向いて…

アルフ「先に帰ってて。すぐに追いつくから…」

フェイト「……うん…」

高町なのはに襲い掛かるアルフ。

しかし、彼女の攻撃が少女に届くことは無かった。

ガギイ！！

ユーノ・スクライアが咄嗟に張った結界が少女を守った。

ギギギ！！

アルフ「ちっ…」

ユーノ「なのは！ あの子をお願い！！」

アルフ「させるとでも……思ってたの！？」

ユーノ「させてみせるさ!!」

アルフとユーノが戦っている場所に魔法陣が出現する。
そして…

アルフ「これは…!」

一瞬でその場から、アルフとユーノが消える。

当麻「一体何が…?」

何が起きているのか把握出来ない少年が、無意識に呟く。
その場に残っているのは、高町なのはとフェイト・テストロッサと
上条当麻だけだった。

フェイト「結界に、強制転移魔法……いい使い魔を持っている」

なのは「ユーノ君は『使い魔』ってやつじゃないよ。私の大切な友達!」

フェイト「で…どうするの?」

なのは「話し合いで、何とか出来るって…ないかな?」

当麻「話し合い…」

フェイト「私は…ロストログアの欠片を……ジュエルシードを集めないといけない。そして、貴女も同じ目的なら、私達はジュエルシードを賭けて戦う敵同士ってことになる」

なのは「だから、そういうことを簡単に決めつけない為に、話し合
いって必要なんだと思う！」

高町なのはの言葉に聞き入る上条当麻。

フェイト・テストロッサがジュエルシードを集める目的は母親の為
だが、もし、フェイトの母親がユーノと同じ目的でジュエルシード
の搜索を命じているのなら、協力できるのかもしれない。

フェイト「話し合うだけじゃ……言葉だけじゃ、きっと何も変わら
ない」

高町なのはの言葉を切り捨てたフェイト・テストロッサは目を閉じ
て…

フェイト「……伝わらない!!」

再び目を開き、なのはに襲い掛かるフェイト。

『Flier Fin』

高町なのはの足よりピンク色の羽根が生えて、空中に移動する。
彼女に続き、フェイト・テストロッサも空へ移動する。

『バルディッシュ』を構えたフェイトは…

フェイト「賭けて。それぞれのジュエルシードを一つずつ！」

『Photon Lancer, get set』

高町なのはの遙か頭上に飛んでいたフェイト・テストロッサ。

『Thunder Smasher』

『バルディッシュ』から発せられる声。

そして『バルディッシュ』の先端部分から、金色の光が放たれた。

『Divine Buster』

高町なのはも『レイジングハート』を構える。

『レイジングハート』から発せられる声と共に、先端から桃色の光線が発射される。

ドゴオオ!!

二つの光線が激突する。

なのは「レイジングハート、お願い!」

『All right!』

高町なのはの呼び声に応えた『レイジングハート』

デイバインバスターの威力が増大して、サンダースマッシャーを打ち破る。

当麻「フェ…フェイト!？」

しかし…

『Scythe Slash』

デイバインバスターを避けたフェイトは、デバイスを変形させて、

高町なのはの懷まで飛び込み…

少女の首筋に魔力刃を突きつけた。

なのは「くっ…」

『Pull out』

レイジングハートが突然、封印していた筈のジュエルシードを二つ出した。

なのは「レイジングハート…何を!？」

予想外の行動に動揺するのは。

フェイト「きつと主人想いのいい子なんだね」

ジュエルソードを手に入れるフェイト・テストロッサ。
地上に降りた彼女は、上条当麻とアルフに声を掛ける。

フェイト「帰ろう…アルフ…当麻」

アルフだけではなく、ユーノもこの場に戻っていた。
その場から立ち去ろうとするフェイト。
しかし…

アルフ「悪いけど…ここで倒させてもらっよ!!」

高町なのはに襲い掛かるアルフ。
突然の行動に、なのはもユーノも動きが取れなかった。

フェイト「アルフ!! やめて!!」

フェイトの制止も振り切って、アルフは少女をその爪で引き裂こうとした。

大切な主人の『敵』を排除する為に…

なのは「ッ!!」

目を瞑ってしまう高町なのは。

しかし、いつまで経っても衝撃が来ない。

恐る恐る目を開けてみると、彼女の目の前には上条当麻が立っていた。

当麻「駄目だよ…アルフ…」

高町なのはとアルフの間に割り込んだ少年は、両手を広げて少女をアルフの攻撃から守っていた。

そんな上条当麻の姿を見たアルフは…

アルフ「…分かったよ」

狼の姿から人間の姿に変化する。

当麻がアルフを止めてくれたことに安堵するフェイト。

フェイト「帰ろう…」

当麻「うん…」

アルフ「ああ……」

その場から立ち去ろうとする三人。

なのは「待って！」

なのはの一言で、三人の足が止まる。

フェイト・テストロッサは振り返って……

フェイト「出来れば……私達の前にもう現れないで。もし次会ったら、今度は止められないかもしれない……」

なのは「名前……貴女の名前は？」

フェイト「フェイト……フェイト・テストロッサ」

なのは「わ、私は……！」

高町なのはの言葉を聞かずに、その場から立ち去る三人だった。

第18話 すれ違う気持ち

海鳴温泉での戦いから二日が経過した。
それぞれの朝を迎える一同。

『高町家』

先日の温泉でのフェイト・テストロッサとの戦いを思い出す高町なのは。

なのは「（きつと…私と同じ年くらいで…深くて綺麗な瞳をした…あの子…）」

自分と同じ年くらいの少女。

なのは「（また…会えば…戦うことになるのかな…？）」

フェイト・テストロッサから投げ掛けられた明確な拒絶の言葉。
恐らく、再び会えば戦いは免れないだろう。

なのは「（それに…）」

フェイト・テストロッサと同じく高町なのはの悩みの原因になっている少年。

なのは「（上条君…一体…何を考えてるの？）」

ジュエルシードの搜索に協力してくれると言ってくれた少年が、フ

エイト・テストロッサと行動を共にしているという事実。

しかし、上条当麻はフェイトやアルフとは異なり、敵対の意思を見せていない。

温泉の一件でも、アルフから高町なのは身を挺して守った。

なのは「（上条君はあの子がジュエルシードを集める目的を知っている…）」

以前、小学校の屋上で少年に少女がジュエルシードを集める目的を聞いた時に、少年は話せないと言った。

なのは「（どうしたらいいんだろう…）」

『マンション』

先日のアルフの行動を思い出す上条当麻。

身勝手な行動をしたアルフをフェイトは叱っていた。

しかし、フェイトの為に行動したアルフを責める事など少年には出来なかった。

温泉での高町なのはとの戦いの後、少しばかり険悪な雰囲気を感じ取っていた八神はやたと絹旗最愛だったが、その事について言及するような真似はしなかった。

当麻「（高町さん…大丈夫かな…？）」

高町なのはのジュエルシード搜索に協力すると言っておきながら、フェイト・テストロッサのジュエルシード搜索を手伝っているという現状。

自分が場を混乱させている事を自覚していた少年。それ故に、彼は強い罪悪感を抱いていた。

フェイト「当麻…大丈夫？」

先程から色々考え込んでいる上条当麻を心配したフェイトが声を掛ける。

当麻「大丈夫だよ。心配掛けてごめんね」

フェイト「ううん。そんなことないよ」

フェイトは少年が悩んでいる理由の原因は自分であると感じていた。少年と先日戦った少女が親しいかどうかは不明だが、クラスメートを傷付けられて心中穏やかではないだろう。

これ以上自分の前に現われないと警告したが、彼女がもう自分の前に再び現われないという保障は無い。

少年のクラスメートを傷付けるのは忍びないが、例え少年とは無関係であっても、心優しい少女にとって人を傷付けるのは望まない行為だった。

しかし、母親の為にジュエルシードを集めている少女は、止まるわけにはいかなかった。

暗い雰囲気で迎えた朝食。

明らかに普段とは異なる雰囲気を感じ取った絹旗最愛は、何が起きているのか理解出来ていなかったが、その事について口を出す様なことはしなかった。

『私立聖祥大附属小学校』

バン！！

アリサ&仕上「いい加減にしなさいよ（しろよ）！！」

机を叩きつけて怒りを露にする浜面仕上とアリサ・バニングス。

仕上「ふざけんじゃねえよ!!」

アリサ「こないだから何話しても上の空で…!!」

仕上「そんなに俺達と一緒にいるのは嫌なのかよ!？」

少年と少女の怒りの矛先は、上条当麻と高町なのはに向けられていた。

当麻「そんなわけじゃ…」

なのは「ご…ごめんね…アリサちゃん…」

仕上「じゃあ何でそんな顔してんだよ!!」

アリサ「ごめんじゃない!! 私達と話すのが退屈なら二人でずっと居ればいいじゃない!!」

ダッ!!

教室を出て行ったアリサ・バニングスと浜面仕上。

すずか「…アリサちゃん…浜面君…」

なのは「…」

すずか「なのはちゃん…上条君…」

なのは「いいよ…すずかちゃん…今は私が悪いから…」

当麻「ごめんなさい…」

すずか「そんなことないよ…二人とも言い過ぎだよ…少し話してくるね…」

なのは「ごめんね…」

二人を追いかけてそのまま教室から出て行く月村すずか。

教室に残された上条当麻と高町なのは。

アリサ・バニングスと浜面仕上を追いかけていた月村すずか。

アリサと仕上を発見したすずか。

すずか「アリサちゃん…浜面君…！」

仕上「何だよ…」

アリサ「何よ…」

すずか「何で怒ってるのかなんとなく分かるけど…駄目だよ…」

アリサ「悩んでるのも困ってるのも丸分かりじゃない！！大丈夫って言ってるけど嘘じゃない！！」

仕上「友達じゃねえのかよ！！」

すずか「どんなに仲良しの友達でも言えない事もあるよ…」

アリサ「だからそれがむかつくのよ!!」

仕上「辛い時があるなら支え合っのが友達だろうが!!」

すずか「二人とも…上条君やなのはちゃんが好きなんだね…」

仕上「当たり前だろ!」

アリサ「そうよ!」

大切な友達だからこそ、抱え込んでいる悩みを打ち明けてくれない上条当麻と高町なのはに対して、怒っていた浜面仕上とアリサ・バニングス。

アリサ「なのはが居たから私は一人ぼっちじゃなくなった…」

すずか「私もだよ…」

仕上「…」

放課後を迎えてバラバラに帰る一同。

なのは「一人で帰るのって…久しぶりかな…」

気が沈んでいる高町なのはは寄り道して帰ることに決めた。
車に乗って稽古に向かっていたアリサ・バニングスと月村すずか。

すずか「初めて会った時は…私…今よりずっと気が弱くて…誰に何を言われても反論出来なくて…」

アリサ「私は我ながら最低な人間だったっけね…自信家で強がり
で我儘で…心が弱かったからね…」

すずか「私も…弱かったから…何も言えなかった…」

アリサ「やめなよって言われても聞かなかった。他人の言う事を聞
いていたら何かに負けちゃうって思ってたから…」

昔を思い出す少女達。

我儘放題だったアリサの頬を引つ叩いたのは。

すずか「あの時、なのはちゃん…何て言ってたっけ？」

アリサ「『痛い？でも、大事な物を取られちゃった人の心はもつと
もつと痛いんだよ？』…って」

すずか「アリサちゃんとなのはちゃんがその後、大喧嘩しちゃった
っけ？」

アリサ「それを止めてくれたのがあんただったなんてね…」

すずか「あ…あの時は…だって…必死だったんだよ…」

アリサ「それから少しずつ話をするようになったんだっけ…」

高町なのはと親しくなった切っ掛けを思い出すアリサ・バニングス。

アリサ「浜面には三カ月後に会ったんだっけ？」

すずか「うん…」

アリサ「意地の悪い男子がよくからかってきた時に『やめろよ!』
って言うてたわよね」

すずか「そうだったね」

アリサ「男子の中にも良い奴がいるんだって思ってたさ…」

すずか「うん」

アリサ「それで今年には上条に出会った」

すずか「転校したばかりなのに一緒に猫を探してくれて…」

アリサ「上条となのはが私達を心配させたくないのは分かってる。
それに…私達じゃ上条となのはの助けにはならない…待っててあげ
ることしか出来ないなら…」

すずか「…」

アリサ「じゃあ!私はずっと怒ってる!気持ちを分け合えない寂し
さと!親友の力になれない自分に!」

すずか「意地っ張り…」

アリサ「フンだ!」

少し前、高町なのはは公園のベンチに座っていた。

なのは「(アリサちゃんと喧嘩しちゃった…)」

彼女達をジュエルシードの問題に巻き込みたくない故の行動が、逆に彼女達を心配させてしまっていたことに心を痛める少女。

「なのは「（怒らせちゃったな…ごめんね…アリサちゃん…浜面君…）」

ベンチに座り込んでいた高町なのはだったが、そこで…

当麻「…僕のせいで…」

なのは「!?!」

上条当麻の声が聞こえて動揺する高町なのは。
急いで周囲を見る少女。

どうやら、ある程度離れたベンチに少年が座っていた。
どうやら、少年は少女に気付いていないようだった。

当麻「やっぱり僕は…疫病神なのかな…」

なのは「（疫病神?）」

疫病神という言葉に違和感を覚える高町なのは。

そのまま少年はベンチから立ち上がりその場から立ち去る。

上条当麻も高町なのはと同じ様に、自分一人で全てを抱え込む性質だからこそ、少年も同じ様に浜面仕上と喧嘩してしまったのだろう。
似た様な状況に置かれた高町なのはと上条当麻。

なのは「…上条君…」

『マンション』

アルフ「んゝトウマの料理も美味しいけどこれもやっぱり美味しいねゝゝ」

ドッグフードを笑顔で食べるアルフ。

基本的な食事は上条当麻が作るのだが、おやつとしてドッグフードを食べるアルフだった。

アルフ「さつて…うちのお姫様はつと…」

フェイトが居る場所まで移動するアルフ。

少女はベッドにうつ伏せになっていた。

フェイトの背中には傷が刻まれていた。

その姿を見て表情が暗くなるアルフ。

アルフ「フェイト…」

フェイト「そろそろ行こうか。当麻はまだ帰ってきてないけど…次のジュエルシードの大まかな位置特定は出来ているし…あまりお母さんを待たせたくないし…」

アルフ「そりゃあまあ…フェイトはあたしのご主人様で、あたしはフェイトの使い魔だから、行こうって言われりゃ行くけどさ…」

ジュエルシードの搜索にあまり乗り気でないアルフ。

フェイト「それ…食べ終わってからでもいいから」

ドッグフード片手にフェイトに話しかけていたアルフは、慌ててド

ツグフードを手放す。

アルフ「そうじゃないよ！あたしはフェイトが心配なの！広域探索の魔法はかなりの体力を使うのに…フェイトってば休まないし…その傷だって軽くは無いんだよ！？トウマだって心配するよ！？」

フェイト「平気だよ…私は強いから…」

アルフ「…」

フェイト「さあ行こう？お母さんが待ってる」

ジュエルシードの搜索に向かおうとしているフェイト。

当麻「遅くなってごめん！」

そこでフェイトの部屋に上条当麻が入ってくる。

フェイト「と…当麻！？」

アルフ「トウマ！？」

先程帰宅したばかりの少年に驚きを隠せない二人。

当麻「ごめん！すぐ準備…を…」

少年の動きが止まる。

当麻の言葉が詰まった事に疑問を感じるフェイトとアルフ。

当麻「フェイト…その傷…」

フェイト&アルフ「!？」

背中に刻まれた傷を少年に見られた事に気付く二人。

フェイト「こ…これは…」

当麻「ちよつと待ってて!!」

急いで部屋から出て行く上条当麻。

恐らく薬を買う為に出て行ったのだろつ。

フェイト「当麻には悪いけど…このまま行こつ…」

アルフ「うん…」

少年を待たずにジュエルシードの搜索に繰り出すフェイト・テスト
ロッサとアルフだった。

『高町家』

ユーノ「そうか…喧嘩しちゃったんだ…」

なのは「違うよ。私がぼくとしてたからアリサちゃんに怒られた
だけ」

ユーノ「親友…なんだよね？」

なのは「うん。入学してからずっとね」

ユーノにたい焼きを渡すなのは。

なのは「今日は塾もないし、晩御飯の時までゆっくりジュエルシード探しが出来るよ。頑張ろう?」

ユーノ「うん…頑張ろう…」

ジュエルシードを探す為に行動を開始する高町なのはとユーノ・スクライアだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3166y/>

とある魔法少女と不幸な転校生

2011年12月19日13時51分発行